

○虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則 明治十五年六月第三十壹號布告
虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則左ノ通制定ス

虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則

第一條 凡ソ虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶ハ検査官ノ検査ヲ受ケ其記名セル許可ノ證書ヲ得タル後ニ非レハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲ス可カラス

第二條 其船中該病患者又ハ該病死者ナキトキハ検査官直チニ其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船客ノ上陸并積荷ノ陸揚ヲ爲スノ許可ヲ與フ可シ

但検査官ニ於テ必要ト認ムルトキハ其船舶ヲ四十八時間以內其指定スル場所ニ碇泊セシメ十分ノ消毒法ヲ施スコトヲ得(十八年第二十九號布告) (告ヲ以テ但書追加)

第三條 若シ其船中ニ該病患者又ハ該病死者アルトキハ検査官其船舶ヲ陸地及ヒ他船ニ傳染ノ虞ナシト認ムル距離ニ於テ其指定スル場所ニ碇泊セシム可シ

該病患者ハ之ヲ避病院若クハ其住居若クハ其他検査官ノ適當ト認ムル場所ニ送致ス可シ其死者ハ 若シ縁故人ノ望アルトキハ其望ニ隨ヒ 地方官所定ノ場所ニ火葬シ若シクハ十分ノ消毒法ヲ施シタル後之ヲ埋葬スヘシ

前項ノ手續ヲ終リ検査官ハ其乗組人船客ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後上陸ノ許可ヲ與ヘ其船舶及傳染ノ虞アリト認ムル積荷ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及積荷ヲ陸上スルノ許可ヲ與フ可シ

第四條 此規則ニ違背シタル者若クハ此規則ノ執行ヲ妨害シタル者ハ刑法ニ依テ之ヲ處分ス可シ

第五條 此規則施行始終ノ期日并ニ場所ハ其都度「内務卿」ヨリ

之ヲ指定ス可シ

○檢疫停船規則明治十二年七月
第貳拾九號布告

沿革略記

明治十二年七月第廿八號布告ヲ以テ海港虎列刺病豫
防規則ヲ制定ス○同年同月第廿九號布告ヲ以テ前令

ヲ改正シ檢疫停船規則ト改稱ス是レ現行法ナリ

明治十二年七月第二十八號布告海港虎列刺病傳染豫防規則別冊ノ通更
正シ檢疫停船規則ト改稱候條此旨布告候事

(別冊)

檢疫停船規則

第一條 日本政府ハ虎列刺病ノ蔓延ヲ防カンタメ茲ニ左ニ掲クル規
則ヲ開港場ニ施行スルヲ布告ス而シテ更ニ其施行ノ停止ヲ令ス
ル迄ハ之ヲ實施スルモノトス

第二條 中央衛生會ニテ決スル處ノ開港場ニ官吏及ヒ至當ノ教育ヲ
受ケ能ク職任ニ堪ユヘキ日本又ハ外國醫士化學士及ヒ相當ノ助役
ヲ以テ地方檢疫局ヲ設置スヘシ而シテ其局員ノ數ハ其港入船ノ多
寡ニ應シテ増減アルヘシト雖モ檢疫一切ノ事務ヲ速ニ整理スルニ
差支ナキヲ以テ足レリトスヘシ

都テ此地方檢疫局ハ中央衛生會ノ管轄ニ屬スヘシ

第三條 政府ハ檢疫停船規則ヲ施行スル各開港場ニ於テ停船場ヲ定
メ且虎列刺患者ヲ容ルヘキ病院并ニ該病ノ疑アル患者ヲ容ルヘキ
病院ヲ建設シ且遺骸ヲ處置スヘキ地消毒法ヲ施行スヘキ場所并ニ
停留セラレタル人ノタメ都テ必需ノ具ヲ備ヘタル屋舎ヲ設置スヘ
シ

第四條 檢疫信號旗ヲ掲ケタル番船ヲ各港口ノ近傍ニ置キ各船入港
ノ前檢査ノタメ之ヲ停止シ地方檢疫局ノ人員少クモ二名ヲ派出シ
テ之ヲ檢査スヘシ但右局員ノ内一名ハ必ス醫士タルヘシ而シテ船

長醫士或ハ船内ノ人ハ誰ニテモ檢疫官吏ノ尋問ニ對シ都テ之ニ應答シ又所定ノ式紙ニ事項ヲ記入シ其氏名ヲ記シタル明告書ニ調印シテ差出スヘシ

船長ハ檢疫官吏ノ求メニ應シ船内ノ各部ヲ開キ検査ヲ受クヘシ但シ艙ハ航海中船客又ハ乗組人ニテ占居シタルキ又ハ他ノ事故ニ依テ病毒ニ感染シタル恐レアルキハ其検査ヲ受クヘシ

檢疫官吏ハ該船ノ航海日記ヲ査閲シ乗組人及ヒ船客ノ人名録ヲ船内現在ノ人員ト引合ハスヲ得ヘシ

第五條 虎列刺病流行セサル港又ハ其疑ナキ港ヨリ來航スル船ノ船長ハ明告書及其他ノ手續ヲ以テ該船有病ノ港又ハ其疑アル港ニ立寄ラス又有病ノ船舶若クハ其疑アルモノト直チニ交通セス且航海中眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲモ船内ニ發セシモノ無キ旨ヲ證明シテ檢疫官吏ヲ満足セシムルキハ該船ハ直チニ入港スルヲ得ヘシ
軍艦ハ其艦長及醫官ニテ調印セル書面ヲ以テ前條ノ趣ヲ明告スル

迄ニテ足レリトスヘシ而シテ該艦ハ検査ヲ經ス入港スルヲ得ヘシト雖モ若シ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ檢疫停船規則ニ從フヘシ

第六條 船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ニ罹リタル者無シト雖モ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルカ又ハ其航海中直ニ有病ノ船若クハ其疑アルモノト交通シタル船舶及ヒ船内ノ人員ハ其港ヨリ出帆ノ日又ハ有病若クハ其疑アル船ト交通ノ日ヨリ起算シテ七日ノ期滿ツル迄ハ停留セシムヘシ但地方檢疫局ニ於テ右ノ時間ヲ短縮スルモ差支ナキヲ認ムルキハ此限ニアラス

右七日ノ期該船來着ノ上又ハ其前既ニ過キ去ルキハ消毒法ヲ行ヒシ上速ニ船客ノ上陸ヲ許スヘシ
一般ノ積荷ハ消毒法ヲ施スニ及ハス自餘ノ物品ハ檢疫官吏ノ見込ヲ以テ消毒法ヲ行ヒ或ハ行ハサルヘシト雖モ爛布古衣夜具ハ勿論其他檢疫官吏ニ於テ殊ニ危険ナリト見込ムモノハ消毒法ヲ行フヘシ

消毒法ヲ行ヒタル物品ハ速ニ陸揚スルヲ得ヘシト雖モ消毒法ヲ行ハサル物品ハ停船ノ定期滿ル迄陸揚スヘカラス若シ停船中眞性虎列刺及ヒ疑似症ヲ發スルキハ其船及ヒ人員物品ハ都テ第八條第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第七條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ル軍艦ハ其艦長及ヒ醫官ヨリ書面ヲ以テ該艦來港前七日以內艦内ノ者有病ノ港或ハ其疑アル港ニ上陸セシヲ無ク又ハ病毒感染ノ恐ナク且航海中艦内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發セシヲ無キ旨ヲ明告スルキハ直ニ入港スルヲ得ヘシ右ノ書面ヲ差出サ、ルトキハ該艦ハ檢疫停船規則ニ從ハシムヘシ

第八條 船舶來港ノ上其船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルキハ檢疫官吏ニテ指示シタル停船場ニ移シテ要用ノ消毒法ヲ行ヒシ日ヨリ起算シテ七日ノ間停船セシムヘシ
船舶來港前病毒消滅シ而シテ檢疫官吏ノ満足スヘキ方法ヲ以テ消

毒法ヲ施行セル上ハ地方檢疫局ニ於テ可トスル程停船ノ時間ヲ短縮シ得ヘシ

消毒法施行後停船中眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルキハ地方檢疫局ノ必要ト考斷スル程消毒法ヲ反復施行シ其施行ノ時ヨリ起算シテ尙三日間停船セシムヘシ但最初定メタル時限猶三日以上アルキハ最初定メタル時限ニ達スル迄停船セシムヘシ

患者及ヒ死者ノ遺骸ハ第九條ニ從ヒ處置スヘシ
第九條 前條ニ記スルカ如キ船舶ノ來着スルニ方リ其乗組ノ患者未ダ癒エサレハ其容体ニ依リ之ヲ避病院ニ移シ若シ已ニ死シテ遺骸ノ處置未タ濟マサルキハ其爲メニ設ケタル場所ニ於テ火葬スルカ又ハ其關係アル者ノ望ミニ任セテ十分消毒法ヲ行ヒシ後埋葬スヘシ

患者及ヒ遺骸ヲ船中ヨリ他ニ移シタル後夜具衣類其他ノ物品及ヒ船内何レノ部分ニテモ病毒感染ノ恐アル者ハ地方檢疫局ニ於テ指

示セル如ク十分ニ消毒法ヲ施スヘシ而シテ消毒法ヲ施ス爲メ要用ノ人ト船中ヲ取締ルヘキ人トノ外都テ船内ノ人員ハ其人ノ爲メ特ニ設クル所ノ家屋ニ移シ消毒法ヲ行フヘシ船内ニ残りタル人員ハ船内ニテ消毒法ヲ受クルカ又ハ交代シテ陸上ニアル適當ノ家屋ニ於テ之ヲ受クヘシ

第十條 有病ノ港或ハ其疑アル港ヨリ出帆シ途中ノ港ヲ經ルト雖モ其港ニ於テ檢疫處置ヲ受ケサル船舶ハ直チニ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルモノト認メ處置スヘシ

第十一條 定期郵便ヲ運搬スル諸船ハ着港ノ上速ニ其郵便物ヲ運送スルコトヲ得ヘシ而シテ政府ハ右ノ郵便物ヲ運送配達ノ爲メ至當ノ方法ヲ設クヘシ

第十二條 病院ニ入ル患者ハ治療及ヒ必要品ヲ受クルヲ得ヘシ病院或ハ停泊ノ船内ニ在ル患者ヲ尋訪セント欲スル人ハ地方檢疫局ニ於テ定メタル方法ニ從フヘシ

避病院ニ關係ナキモ醫業ニ達シタル醫士ハ患者又ハ其代理人ノ請ニ由テ診察協議スルコトヲ得ヘシ

患者ハ醫士ヨリ退院ヲ許ス迄ハ病院ヲ退去スルコトヲ得ス

第十三條 船中ニ於テ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スルコトナキ時ハ停留セラレタル人ヲ船中ニ停メ置コトヲ得ヘシ又ハ地方檢疫局ニ於テ衛生上ノ見込ニ從ヒ特ニ陸地ニ設ケアル避病ノ場所ニ移サル、コトアルヘシ

第十四條 檢疫停船規則施行ノ港ニ來着スル船舶ニ於テ檢疫官吏之ヲ虎列刺ノ源因ヲラント思考スル疑似ノ病徵ヲ發スル者アルキハ其患者ハ病院ノ別室ニ移シ船ハ醫士ニ於テ其病症ヲ審斷スルニ充分ノ時間ヲ終ル迄停留セシムヘシ但其時間ハ四十八時ニ過クヘカラス而シテ地方檢疫局ハ醫士ノ報告ニ依リテ該規則ノ内其場合ニ適スル條款ヲ實施スヘシ

第十五條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヲ發シ船用品或ハ荷物積込ノ爲

メニ途中檢疫所ノ設ケアル無病ノ一港ニ立寄タル船舶ハ豫メ檢疫官吏ノ検査ヲ經且ツ必要ト認メタル消毒法ヲ行ヒ船用品或ハ貨物ヲ積入ル、毎ニ地方檢疫局ヨリ指示スル方法ニ從フ可シ
又該船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發シタルキハ該船又ハ其乗込人及ヒ物品ヲ處置スルハ第八條第九條ニ準スヘシ但シ該船内ヨリ上陸スル者アルキハ他船ニテ到着シタル人ニ行フヘキ同一ノ處置ヲ爲スヘシ

第十六條 船舶ノ検査ハ其來着後成ルヘク速ニ施行スヘシ若シ來着後十二時間ヲ過キテ検査ヲナサ、ル時ハ入港スルヲ得ヘシ但シ其遲延天氣惡キカ爲メカ又ハ避ケ難キ事情アルカ爲メカ又ハ船長若クハ該船ニ關係アル人ノ所行或ハ詐偽ニ出ツルカノキハ此限ニアラス其場合ニ於テハ其遲延シタルノ事故終リタルキ検査ヲ爲スヘシ

第十七條 地方檢疫局ヨリ指圖シタル消毒法ハ檢疫官吏之ヲ施行シ

其船ノ士官及ヒ船員之ヲ補助スヘシ但消毒法ハ之ヲ命シタル時ヨリ成ルヘク二十四時間ニ完了シ而シテ其入費ハ船主又ハ其責アル者ヨリ辨償スヘシ

第十八條 檢疫停船規則ヲ施行スル港内ニ碇泊中船内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發シタル船舶ハ直ニ第八條第九條ノ規則ニ從フヘシ

然リト雖モ若シ其船既ニ本港ニ於テ停留ヲ經タル時ハ檢疫官ハ地方檢疫局ニテ必要ト考斷スル丈ケノミノ消毒及検査ノ方法ヲ反復施行スヘシ

第十九條 虎列刺病既ニ流行スル港内ニ來着スル船舶検査消毒法患者及ヒ死者ノ處置ヲ爲スハ前記ノ規則ニ從ハシムヘシ右ヲ施行スル爲メノ豫備ハ政府ニ於テ爲スヘシト雖モ船及ヒ人員停留ノ規則ハ休止スヘシ

第二十條 第六條第八條及ヒ第九條ニ記スル船舶ノ景狀地方檢疫局

ニ於テ特ニ公衆ノ健康ニ危険ナリト思慮シ非常ノ處置ヲ必要トスルキハ此規則外ニ豫防ノ嚴制ヲ施スコトヲ得ヘシ其場合ニ方リテ地方檢疫局ハ直ニ中央衛生會ニ臨時ノ報告書ヲ差出スヘシ而シテ右報告書ノ寫ハ請求ニ依リテ地方檢疫局ヨリ之ヲ該船ノ船長船主又ハ其用達ニ付與スヘシ

第二十一條 検査中又ハ停留中ノ船舶又ハ停留人ノ寓所ニハ凡ソ何人ヲ問ハス地方檢疫局ノ許可ナクシテ往クコトヲ許サス

第二十二條 前條ノ規則ヲ施行スルニ就テ其人ニ係ル所ノ食料醫藥其他欠クヘカラサル費用ハ其本人又ハ代理人ヨリ辨償スヘシ

第二十三條 此規則ニ背キ或ハ從フコトヲ拒ム者ハ犯ス毎トニ貳百圓以內ノ罰金ヲ科スヘシ若シ其船長船主若クハ其船ノ用達又ハ其各人若クハ一人ノ命令又ハ利益ノ爲メ此規則ニ背キ或ハ從フコトヲ拒ムキハ每犯罰金五百圓ニ至ルマテ増加スルコトアルヘシ

此規則ニ就テ拂フヘキ費用ヲ辨償セサルモノアルトキハ民事ノ訴

刑法第二編第五章第三節
及第四編第四百二十六條
第十四項參行
十四年第七十二號布告前
例處斷方參看第十二類ニ
載ス

訟ヲ以テ之ヲ要求スヘシ

但シ罰金ハ科セサルヘシ

此規則ヲ犯シ停留場ヲ脱去スル者ハ(船又人)罰金ヲ科シ且即時停留場ニ返ラシムヘシ

○種痘規則 明治十八年十一月
第三拾四號布告

沿革略記

明治三年四月府藩縣ヲシテ種痘法ヲ人民ニ普及セシム
○四年十一月文部省ヨリ種痘醫ノ免許狀並痘苗分與等取扱方ヲ各府縣ニ達ス
○七年十月文部省第二十七號布達ヲ以テ種痘規則ヲ定ム
○九年四月内務省甲第八號布達ヲ以テ文部省布達ノ種痘規則ヲ廢シ更ニ種痘醫規則ヲ定ム
○九年五月内務省甲第十六號布達ヲ以テ天然痘豫防規則ヲ定ム
○十八年十一月第三十四號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ種痘規則ヲ定ム是レ現行法ナリ

種痘規則左ノ通制定シ明治十九年二月一日ヨリ施行ス

但明治九年內務省甲第八號及甲第十六號布達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

種痘規則

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシ

第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至七年ニ三種ヲ行フヘシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルトキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラズ掛官吏ノ指定シタル期限内ニ種痘ヲ行フヘシ

第四條 種痘ヲ受クヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フコト能ハサルトキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ隣保ノ證印ヲ爲シタル證書ヲ副ヘ戸長役場ニ届出ヘシ

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムコト得ス

第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戸長役場ニ届出ヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歳未滿ノ者ノ尊長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

貧院育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルトキハ本條ニ準シ其證ヲ付與スヘシ

第九條 第一條第二條第三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度「內務卿」ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事「縣令」ニ於テ便宜取設ケ「內務卿」ニ届出ヘシ

○牛豚類養取締明治六年五月
第百六十三號布告

方今牛豚類ノ牧畜盛ニ行ハレ候處温暑ノ時ニ方テハ其臭氣人身ノ健
康ヲ害スルノミナラス近來獸類ノ傳染病流行往々人生ノ傷害ヲ醸シ
候ニ付自今三府市街ノ區内ハ勿論各地一般人家稠密ノ場所ニテ養
ノ儀堅ク禁止候條右區内ニ於テ從前營業ノ者ハ布令到達ノ日ヨリ三
十五日以内ヲ以テ郊外便宜ノ地ニ立退養可致事

但東京府下朱引内ハ假令草野空間ノ地ト雖モ養不相成候尤乳汁
搾取ノタメ養候ハ被差許候へ共不潔臭穢ノ儀モ有之候へハ詮議
ノ上可令取排事

○賣藥規則明治十年一月
第七號布告

沿革略記 明治三年十二月賣藥取締ノ事務ヲ大學東校ノ所轄ト
爲シ且從來賣藥ノ内有名無實ニシテ猥リニ勅許御免
等ノ文字ヲ用フルヲ禁シ神佛ノ名ヲ假リ或ハ秘傳秘法ト唱
へ小民ヲ欺キ利ヲ射ルノ弊害ヲ除キ爾後有益ノ藥法ヲ施爲
シテ之レカ方法檢査規則手續等ヲ開申セシム○同年十二月
賣藥取締規則ヲ頒布ス○五年七月第貳百貳號ヲ以テ前令廢
止ノコトヲ布告ス○六年十二月第四百廿九號布告ヲ以テ賣藥
取締更ニ文部省ノ管理ト爲シ藥味分量及用法等取調製劑ヲ
添へ同省ノ檢査ヲ受ケシム○八年六月第百十二號布告ヲ以
テ衛生ノ事務ヲ内務省ニ屬セシム○十年一月第七號布告ヲ
以テ賣藥規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

賣藥規則別冊ノ通相定候條此旨布告候事

(別冊)

賣藥規則

第一章

第一條 此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥浴劑散藥煎

藥等ヲ調製シ效能書ヲ附シ販賣スルモノヲ云フ(十年第八十九號
布告ヲ以テ改正)

第二條 此賣藥營業者ハ藥味分量用法服量效能ヲ詳記シタル書ニ族

籍氏名ヲ記シ其管轄廳ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ(十一年第廿七號
布告ヲ以テ其管

轄廳ノ下ヲ經由シテ
內務省ノ八字ヲ刪ル)

但免許ヲ受ケタル者ニケ所以上ニ於テ之ヲ調製スル時ハ其箇所

毎ニ免許鑑札ヲ受クヘシ(十五年第五十二號布
告ヲ以テ但書追加)

第三條 管轄廳ニ於テハ願書ヲ檢査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ

拘ハラヌ取扱上失誤ヲ生シ易キモノ及ヒ毒藥劇藥取締ニ關係スル

モノハ之ヲ許サ、ルヘシ(十一年第廿七號布告ヲ以テ內務省ヲ管轄
廳ニ改メ毒藥ノ下ニ劇藥ノ二字ヲ加フ)

第四條 第八條ニ記シタル期限中藥味分量用法服量能書ヲ改正セシ

ト欲スルモノ其由ヲ届出舊鑑札ヲ返納シテ更ニ新鑑札ヲ願受クヘ

シ

第五條 賣藥ヲ請賣セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タルモノハ族籍

氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持ノ免許鑑札寫及ヒ營業者ト取結

タル約定書トヲ添ヘ其管轄廳ヘ願出免許鑑札ヲ受クヘシ(十年第
八

告ヲ以テ改正十一年第廿七號布告ヲ以テ鑑札ヲ受
クヘシ
ノ下ケ管轄廳以下十三字ヲ刪リシノ一字ヲ加フ)

第六條 賣藥營業者及ヒ請賣者共必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ

第七條 賣藥營業者及ヒ請賣者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ派出シ

テ行商ヲ爲サシメント欲スルキハ其由ヲ管轄廳ヘ届出行商鑑札ヲ

願受ケ行商スル時ハ必ス之ヲ所持スヘシ

第八條 營業鑑札請賣鑑札行商鑑札ハ其鑑札記載ノ月ヨリ滿五年ヲ

以テ免許ノ期限トス此期限ヲ過キ尙免許ヲ得ント欲スルモノハ舊

鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第九條 第八條ニ記シタル期限中第四條ノ改正發賣ヲ願出之ヲ免許

スル時ハ新鑑札記載ノ月ヲ以テ一期ノ初月トナスヘシ

第十條 免許期限内ト雖モ其製藥第三條ニ掲クル處ノ有害品ナルヲ

更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノコアル時ハ直ニ

鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルヲアルヘシ(十一年第廿七號布告ヲ以テ有毒ヲ有害ト改ム)
第十一條 營業者廢業スルカ又ハ禁止セラル、時ハ其請賣者及ヒ賣子共其販賣ヲ許サス

第十二條 諸鑑札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタル時ハ其仔細ヲ詳記シテ管轄廳ヘ届出再ヒ之ヲ願受クヘシ

第十三條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡サント欲スル者ハ雙方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十四條 賣藥營業者及ヒ請賣者免許期限中其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ管轄廳ヘ鑑札名前書換ヲ請フヘシ(十年第廿九號布告ヲ以テ改正)

第十五條 賣藥營業者廢業シ若シクハ禁止セラレタルハ營業者ハ勿論其請賣者ニ於テモ總テ諸鑑札ヲ返納スヘシ

第二章

第十六條 賣藥營業者ハ左ノ通税金并鑑札料ヲ上納スヘシ(十四年第廿六號布告)

(告ヲ以テ賣藥營業者ノ下及ヒ請賣者ノ五字及ヒ賣藥請賣鑑札料賣藥行商鑑札料ノ二項刪除)
賣藥營業稅 藥劑一方ニ付一ケ年 金貳圓

右鑑札料 藥劑一方ニ付一枚 金貳拾錢

但第二條但書ニ依リ免許鑑札ヲ受クル者ハ其箇所毎ニ本文ノ税金并鑑札料ヲ納ムヘシ(十五年第五十二號布告ヲ以テ但書追加)

第十七條 水火盜難ニ因リ鑑札ヲ毀失シ更ニ新鑑札ヲ願受ル時ハ其鑑札料ノ半高ヲ納ムヘシ

第十八條 税金ハ毎年兩度ニ區分シ前半年分ハ一月三十一日限リ後半年分ハ七月三十一日限リ鑑札料ハ其都度并ニ管轄廳ニ上納スヘシ(十一年第四號布告ヲ以テ税金納期改正)

第十九條 税金ハ六月以前免許ノ者ハ全年分七月以後ハ半年分廢業ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分ヲ納ムヘシ

但第十條ノ有害品ナルヲ更ニ發見セシ時ニ限リ月割ヲ以テ税金ヲ納ムヘシ(十一年第廿七號布告ヲ以テ有害ヲ有害ト改ム)

第三章

第二十條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者及ヒ之ヲ貸ス者又ハ期限過タル鑑札ヲ以テ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者ハ其鑑札ヲ取上ケ藥劑一方ニ付五圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十一條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ又ハ期限過タル鑑札ヲ以テ請賣スル者及ヒ無鑑札ノ者ヲシテ請賣セシメ又ハ鑑札ヲ貸ス者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ沒收シ藥劑一方ニ付拾圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十二條 免許ヲ受ケスシテ私ニ藥味分量用法服量能書等ヲ改更シ又ハ許可ヲ經スシテ無稽ノ妄説ヲ記載シ世人ヲ街惑スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ沒入シ藥劑一方ニ付拾圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十三條 無鑑札ニテ營業スル者又ハ營業者ニシテ私ニ請賣者ニ藥劑ヲ調製セシムル者又ハ請賣者自ラ之ヲ調製スル者ハ其製藥及ヒ賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付貳拾五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

刑法第二編第四章第五節
及第二編第五章第五節
看

科スヘシ(十四年第十六號布告ヲ以テ營業スル者)

第二十四條 諸鑑札ヲ偽造シ又ハ他人ノ賣藥ヲ贋造シテ發賣スル者ハ其製藥及ヒ其賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付五拾圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十五條 私ニ有毒藥ヲ配伍スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥及ヒ其賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十六條 以上ノ犯則者ヲ見届ケ訴出ル者アル時ハ事實取糺ノ上相違ナキニ於テハ其賞トシテ其罰金ノ半高ヲ與フヘシ

○ 藥品取扱規則 明治十三年一月 第一號布告

沿革略記 明治七年九月文部省ヨリ毒藥取扱方法ヲ東京京都大阪ノ三府ニ達ス○同年十二月藥品ノ賣買取締方法ヲ

三府ニ達ス○十年二月第廿號布告ヲ以テ毒藥劇藥取扱規則
ヲ制定ス○十三年一月第壹號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ藥品取
扱規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

藥品取扱規則左ノ通相定來ル二月十五日ヨリ施行シ明治十年二月第二
十號布告毒藥劇藥取扱規則ハ右同日限相廢候條此旨布告候事

藥品取扱規則

第一條 凡ソ藥品中最注意シテ精選スヘキモノヲ第一類注意トシ其

性効峻烈ニシテ僅少ノ分量ト雖モ直チニ生命ヲ傷害スルニ足ルヘ

キモノヲ第二類毒藥トシ其性効第二類ノ如ク峻烈ナラサルモ用量ニ

因テ容易ニ危害ヲ來スヘキモノヲ第三類劇藥トシ其類目別表ノ如シ

但新タニ發見及ヒ舶齋シタル藥品ハ先ツ最寄司藥場ニ出シテ試
驗ヲ受ケ其告示スル所ニ從フヘシ

第二條 第一類藥品ハ其性効ノ緩劇ニ拘ハラヌ若シ精良ナラサルト

キハ醫師ノ目的ヲ誤リ以テ人命ヲ危フスルカ故ニ其粗製品故意ニ
混シタルコアラハ全ク化學製造上或ハ採收ノ際ハ之ヲ藥用トシテ販
其法疎漏ニシテ純精ナラサルモノノ類ヲ云フ

賣スヘカラス

但藥舖ニ於テ自ラ其良否ヲ鑑別シ能ハサルトキハ最寄司藥場ニ
請ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得(十七年第二十五號布告ヲ以テ請
ヒノ下無費コト其ノ五字ヲ削ル)

第三條 第一類中ノ粗製品ト雖モ仍ホ學術上工職上等ノ用ニ供スル
ニ足ルモノハ粗製ノ字ヲ其器ニ明記シ之ヲ販賣スルコトヲ得

第四條 第二類第三類ノ藥品ハ醫師ノ處方書ニ據テ調合スルノ外醫
師藥舖化學者製藥者工職者等ヨリ品名量數需用ノ目的年月日及ヒ
住所姓名ヲ詳記シタル證書ヲ以テスルニアラサレハ決シテ販賣或
ハ授與スヘカラス

但證書處方書ハ之ヲ保存シ臨時ノ點檢ニ供スヘシ且本條ノ手續
ニ依ルモノト雖モ幼稚ノモノ其他不安心ト認ムルモノニハ一切
交付スヘカラス

第五條 第二類第三類ノ藥品ヲ販賣スルトキハ其器若クハ包紙ヘ必
ラス普通ノ名稱ヲ記シ且第二類ハ毒ノ字第三類ハ劇ノ字ヲ明書ス

但醫師ノ處方書ニ據ラスシテ封緘ヲ開キタル第二類第三類ノ藥品ヲ小賣若クハ授與スルトキハ本文ノ外更ニ適應ノ器ニ入レ密閉封印スヘシ

刑法第三編第五章第五節
第十四第七十二號布告
例處斷方參看十二類ニ載ス

第六條 第二條第四條本文ニ背戾シ又ハ贋品ニ混合シテ其物品ヲ本品ニ増スモノ若クハ他ノ物品ヲ以テ本品ニ擬シ或ハ名箋ヲ變換スルモノ、類ヲ云フ 敗品ニ總テ酸敗風化或ハ潮解敗ニ傾ク等ニ因リ其藥品本性ノ効力ヲ變シ或ハ其効力ヲ失スルモノ、類ヲ云フ 販賣スルモノハ其贋敗品ヲ没入シ三拾圓以上五百圓以下ノ罰金若クハ壹月以上壹年半以下ノ懲役第一條但書第四條但書及第三條第五條ニ背戾スルモノハ壹圓以上貳拾五圓以下ノ罰金若クハ壹日以上貳拾五日以下ノ懲役ヲ科シ又ハ罰金懲役ヲ併セ科スヘシ

第七條 右ノ罰則ヲ再犯スルモノハ其本罰ノ最多限ニ貳倍以下ノ罰ヲ科シ三犯スルモノハ本罰ノ最多限ニ三倍以下ノ罰ヲ科スヘシ

第一類注意表

- 印度大麻葉及其製劑
- 莨菪葉並根及其製劑
- 麥奴及其製劑
- 番木鱈子及其製劑
- 乳酸鐵
- ヘプシ子
- 吐根
- 吐酒石
- 礮砂精(アンモニア水)
- ヂキタリス葉及其製劑
- カラバル豆及其製劑
- 肝油
- ヨシウム
- 沃土加里

沃土鐵舍利別

第一沃土汞(黃色沃土)

第一コロール汞(甘汞)

第二コロール汞(昇汞)

炭酸アンモニヤ(硝砂華)

老利爾結兒私水并苦扁桃水

蔓陀羅華及其製劑

葯刺巴脂并球根及其製劑

芫菁(斑蝥)

コロ、フォルム

コロラルヒドレート

格魯失屈謨實及其製劑

格魯董篤實及其製劑

アトロヒ子鹽類

阿片製劑
 サントニー子
 醋酸アンモニヤ水(ミンデレリ精)
 薩爾撒根
 カリシール酸及鹽類
 機那皮
 規尼涅鹽類
 綿馬及其製劑
 硝酸銀
 失鳩答草及其製劑
 萘酸モリウム
 臭素加里(プロウムカリウム)
 (臭素刺篤亞私)
 エーテル(アール)
 鹽基性硝酸蒼鉛

ヒヨンス葉及其製劑

蓖麻子油

莫爾比涅鹽類

水素還元鐵

第二類藥表

燐

カンタリダー子

クラール(矢毒)

亞砒酸(異名白砒石、礬石)其製劑及砒抱合物(鷄冠、雄黃、雌黃ノ類)

揮發苦扁桃油

有毒性アルカロイド并其鹽類

ニコチ子。デキタリ子。ナルセー子。ヴェラトリ子。ブルシ子。コニ
ー子。コデー子。アトロヒ子。アコニ子。エメチ子。ヒヨシアミ子。
モルヒ子。ストリキニー子。等

猛劇汞劑

白降汞。第一沃汞。第二沃汞。昇汞。赤降汞。硝酸亞酸化汞。青酸汞。生
々乳

青酸及其製劑

第三類藥表

印度大麻葉及其製劑

莨菪葉并根及其製劑

番木鱉及其製劑

巴豆及巴豆油

麥奴及其製劑

ポドヒリオン

ヘルレボル根及其劑製

吐根及其製劑

吐酒石其他安質莫尼製劑

毒高苜及其製劑

藤黃

ヂキタリス葉及其製劑

硫酸

カラバル豆及其製劑

苛性加里(腐蝕加里)

苛性曹達(腐蝕曹達)

芥子油及芥子精

甘汞及輕粉、汞灰散、藍丸

ヨヂウム及其製劑

沃土加里

ヨヂウム鐵

ヨードホルミウム

雙鸞菊球根(烏頭)及其製劑

老利爾結兒私水并苦扁桃水

ヴェラトリ根

過酸滿俺酸加里及曹達

蒟刺巴脂并球根及其製劑

蔓陀羅華葉及其製劑

羌菁(斑猫)及其製劑

ケレチソート

ブロミウム(ブローム)

コロム酸

コルシクム實并根及其製劑

コロシント實及其製劑

コロ、フォルム(迷朦水)

コロトシコロラルヒドレート

コロラルヒドレート

コロダイン
 コロム酸加里及重コロム酸加里
 阿片及其製劑
 亞鉛華其他亞鉛製劑
 サビナ葉及其製劑
 醋酸鉛(鉛糖)其他鉛製劑
 サントニー子
 次醋酸銅其他銅製劑(酸化銅類)
 硝酸(硝石精)
 硝酸銀
 矢鳩答葉其製劑
 臭素加里
 鹽酸(海鹽精)
(鹽化冰素酸)
 鹽化金ナトリウム

鹽酸重土其他重土製劑
 鹽基性硝酸蒼鉛其他蒼鉛製劑
 エウホルピウム及其製劑
 ヒヨス葉及其製劑
 石炭酸
 瑞香皮及其製劑
 スカンモニー脂
 ○石炭酸等傳染病流行ノ際販賣方明治十三年五月
第貳拾三號布告
 石炭酸其他劇藥ハ本年一第壹號布告藥品取扱規則第四條ニ照シ
 可取扱ノ處傳染病流行ノ際ハ内務省布達ニ從ヒ消毒藥ニ調製候
 分ニ限リ藥舖ニ於テ販賣差許候條販賣望ノ者ハ其管轄廳ニ可願
 出此旨布告候事

○藥用阿片賣買并製造規則 明治十一年八月 第廿壹號 布告

沿革略記 明治三年八月布告ヲ以テ生阿片取扱規則ヲ制定ス○
十一年八月第廿壹號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ藥用阿片
賣買并製造規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

明治三年八月布告生阿片取扱規則ヲ廢シ藥用阿片賣買并製造規則左
ノ通相定候條此旨布告候事

但施行ノ時日ハ追テ内務省ヨリ可相達事

藥用阿片賣買并製造規則

第一條 阿片ノ賣買及ヒ製造ハ藥用品ニ限り此規則ニ依テ之ヲ許可
ス

第二條 藥用阿片ハ其内國產若クハ外國產ヲ論セス總テ内務省ニ於
テ其品位ヲ定メテ之ヲ買上ケ然ル後テ各司藥場ヨリ阿片卸シ賣特
許藥舖ニ拂下ケ之ヲ賣捌カシムヘシ

但司藥場ヲ置カサル地方ニ於テハ該地方廳ヨリ之ヲ拂下クヘシ

第三條 各司藥場ヨリ拂下クル所ノ阿片ハ量目壹匁ヲ以テ一器トシ
每器司藥場ノ印紙ヲ貼附スヘシ

第四條 地方廳ハ土地ノ廣狹位置ヲ度リ一管内相當ノ人員ヲ限リ藥
舖ノ身元人物ヲ選ミテ内務省ニ稟議シ鑒札ヲ受ケテ之ヲ本人ニ交
付スヘシ

但廢業ノ者アル節ハ其鑑札ヲ内務省ニ返納スヘシ

第五條 特許鑒札ヲ受タル藥舖ノ住所姓名ハ該管轄廳ヨリ管内ノ公
私病院醫師藥舖一般ニ報告スヘシ

但廢業ノ者アル節モ本文ニ準シ速ニ報告スヘシ

第六條 特許鑑札ヲ受タル藥舖ハ其店頭ニ特許藥用阿片賣捌所ト大
書シタル看板ヲ掲ケ置クヘシ

第七條 特許ヲ受タル藥舖ハ半年分賣捌ノ高ヲ豫算シ毎年兩度最寄
司藥場司藥場ナキ地
方ハ該地方廳ニ申立テ其拂下ケヲ請フヘシ但缺乏ノ節ハ臨

時拂下ケテ請フコトヲ得

第八條 凡ソ醫師病院及ヒ一般藥舖等ニ於テ藥用阿片ヲ要スルハ其量目并ニ其住所姓名及年月日病院ハ其名稱及ヒ院長若クハ副長ノ姓名ヲ記シ調印シタル證書ヲ以テ特許藥舖ニ就キ之ヲ購求スヘシ特許藥舖ニ於テハ之ヲ賣渡スニ其量目一度ニ四拾匁ヲ超ヘカラス

但病院及醫師等ニ於テ便宜ニ依リ一般藥舖ニ就キ之ヲ購求スルト一般藥舖相互ニ賣買スルトハ妨ケスト雖モ必ス本條ノ證書ヲ以テスヘシ且其量目一度ニ八匁ヲ超ヘカラス

第九條 凡テ内外國人共醫師ノ處方箋ヲ持參シタル者ノ外ハ特許藥舖并ニ一般藥舖ニ於テ一切之ヲ賣渡スヘカラス

第十條 特許藥舖ハ每半年分阿片拂受并ニ壹匁以上賣捌ノ高及ヒ買人ノ住所姓名并ニ壹匁以下賣捌ノ總高等明細表正副二通ヲ造リ其管轄廳ニ差出スヘシ尤壹匁以下ノ分ハ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

但管轄廳ハ其一通ヲ内務省ニ進達スヘシ

第十一條 醫師病院一般藥舖ニ於テハ每半年必シモ前條明細表ヲ差出スヲ要セスト雖モ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

第十二條 藥用阿片ヲ製造セント欲スル者ハ罌粟ノ種類及ヒ培養採收製造ノ方法ヲ記シ管轄廳ヲ經由シテ内務省ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第十三條 阿片製造人ハ其製造シタル阿片ノ量目ヲ記シ署名調印シタル願書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ内務省ノ買上ケテ願フヘシ右買上ケテ受クルノ外決シテ内外人民ニ販賣スルコトヲ許サス

但司藥場ニ於テ其品位藥用ニ適セサル者トスルモハ地方廳ヨリ其旨ヲ製造人ニ通知シ其阿片ハ其廳ニ預リ置クヘシ

第十四條 阿片買上ケ及ヒ拂下ケノ代價ハ歲ノ豐凶及ヒ外國一般ノ相場等ニ因テ高低アルヘシト雖モ其品位ニ應シテ價格ヲ定ムルハ

該藥主用ノ性分即チ「モルヒネ」ノ多少ニ因ルヘシ

第十五條 内務省ニ買上ケ及ヒ拂下クル所ノ阿片ハ百分中ニ「モルヒネ」六分以上十一分ニ至ルマテヲ含有スル者ニ限ルヘシ

第十六條 此規則ニ違犯スル者ハ其犯情ニ從ヒ阿片賣買若クハ製造ヲ禁シ其所有ノ阿片ヲ沒收シ百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

○醫師免許規則 明治十六年十月第三拾五號布告

沿革略記

明治六年六月文部省第八拾九號達ヲ以テ現時醫術開業者ノ明細書及醫師ノ人員等ヲ申達セシム○七年三月文部省達ヲ以テ醫制ヲ定メ先ツ三府ニ於テ漸次施行セシム○八年二月文部省ヨリ醫制ニ基キ新ニ醫術開業者ノ試験科目ヲ三府ニ達ス○同年四月醫制ヲ改正ス○同年六月第百拾貳號布告ヲ以テ文部省管理衛生ノ事務ヲ内務省ニ屬ス○

九年一月内務省乙第五號達ヲ以テ新ニ醫術開業セントスルモノ、試験科目ヲ定ム○十年八月内務省乙第七十六號達ヲ以テ維新以來官廳及地方公立病院ニ於テ醫術ヲ以テ奉職從事ノ者ハ試験ヲ須ス免狀渡方ヲナサシム○十二年二月内務省甲第三號達ヲ以テ文部卿ノ認可ヲ得タル醫學校^{十五}卒業生ハ試験ヲ要セス開業免狀ヲ下付スルモノトナス○同年八月第三十九號布告ヲ以テ醫師タル者醫業ニ關シ犯罪若シハ不正ノ行爲アルトキハ其業ヲ停止若クハ禁止ス○十六年十月第三十五號布告ヲ以テ醫師免許規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

醫師免許規則別冊ノ通制定シ明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十五年^二第四號布達同年^八第三拾九號布告ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

(別冊)

醫師免許規則

第一條 醫師ハ醫術開業試験ヲ受ケ「内務卿」ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ「内務卿」ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ「内務卿」ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 醫師ニ乏キ地ニ於テハ府知事「縣令」ノ具狀ニヨリ「内務卿」ハ醫術開業試験ヲ經サル者ト雖トモ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登録シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ
第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務省ニ返納スヘシ

第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經「内務卿」ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖トモ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條 前條ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ内務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十三條 「内務卿」ハ醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖トモ本人ノ行狀ヲ勘査シ中央衛生會ノ審議ヲ經特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ

○醫術開業試驗規則 第三十六年十月
今般第三十五號ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試驗規則別冊ノ通相定メ明治十七年一月一日ヨリ施行ス
但明治十二年ニ内務省甲第三號布達ハ同日ヨリ廢止ス
(別冊)

醫術開業試驗規則

第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試驗ヲ受クヘシ
第二條 「内務卿」ハ毎年二回醫術開業試驗ヲ舉行スヘシ但試驗ヲ

舉行スヘキ地方及ヒ試驗期日ハ六ヶ月前之ヲ「内務卿」ヨリ告示スヘシ

第三條 「内務卿」ハ醫術開業試驗ヲ舉行スル毎ニ官立及ヒ府縣立醫學校病院ニ從事スル者又ハ地方ニ於テ學術名望アル醫師理化學者等ヲ選ヒ試驗委員ヲ命スヘシ
但齒科醫術開業試驗ニ於テハ齒科醫壹名ヲ試驗委員ニ加フルコトアルヘシ

第四條 「内務卿」ハ主事者ヲ派遣シ試驗一切ノ事ヲ監督整理セシムヘシ

第五條 醫術開業試験ハ之ヲ二期ニ分チ前期試験後期試験トス前後二期ノ試験ヲ同時ニ受ルコトヲ得ス

但齒科醫術開業試験ハ全科一時ニ受クルモノトス
第六條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

前期試験科目

- 第一 物理學
 - 第二 化學
 - 第三 解剖學
 - 第四 生理學
- 後期試験科目
- 第一 外科學
 - 第二 内科學
 - 第三 藥物學

第四 眼科學
 第五 產科學
 第六 臨床實驗
 第七條 齒科試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ
 第一 齒科解剖及生理
 第二 齒科病理及治療
 第三 齒科用藥品
 第四 齒科用器械
 第五 實地試驗
 第八條 前期試驗ハ一ケ年半年以上後期試驗ハ更ニ一ケ年半年以上修學セシキ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス
 但齒科齒術開業試驗ハ二ケ年以上修學セシキ者ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス(十七年第二號布達)
 第九條 前期試驗ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ニ後期試驗ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前期試驗及第ノ證書ヲ副ニ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス但履歷書ニハ其師若クハ他ノ開業醫師二名以上ノ保證アルヲ要ス
 第十條 地方廳ニ於テ試驗出願者中醫事ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行為アリト認ムル者アルトキハ之ヲ内務省ニ具狀スヘシ内務省ニ於テハ中央衛生會ノ審議ヲ經キ其情狀ニ因リ期限ヲ定メ

試驗ヲ許サ、ルコトアルヘシ
 第十一條 試驗問題ハ試驗主事者試驗委員協議ノ上之ヲ撰定シ試驗場ニ臨ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ
 但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ
 第十二條 試驗主事者ハ試驗終ルノ後試驗委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ直チニ及第證書ヲ與フヘシ
 但及第證書ニハ試驗主事者試驗委員連署スヘシ
 第十三條 試驗ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得ス
 第十四條 醫術開業試驗ヲ受クル者ハ試驗開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ
 前期試驗手数料 金三圓
 後期試驗手数料 金五圓
 齒科試驗手数料 金五圓
 第十五條 受験中疾病及ヒ其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前條ノ手数料ヲ返付セス
 ○入齒々抜口中療治接骨等營業者取締方十八年三月十七號達
 入齒々抜口中療治接骨等營業者ハ明治十六年十月第三十四號布達ニ據リ醫術開業試驗ヲ經ルニ非サレハ新規開業不相成候條從來之營業者ハ此際各地方廳ニ於テ鑑札ヲ付與シ相當之取締法相

立可申此旨相違候事
但既ニ取締法相設居候向ハ更ニ本文之手續ヲ爲スニ及ハス

○ 獸醫免許規則 明治十八年八月
第貳拾八號布告

獸醫免許規則別冊ノ通制定シ明治十九年七月一日ヨリ施行ス

(別冊)

獸醫免許規則

第一條 獸醫ハ獸醫學術ノ試験ヲ受ケ「農商務卿」ヨリ開業免狀ヲ得
タル者トス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經
由シテ農商務省ニ願出ツヘシ

第三條 官立及府縣立ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ノ卒業
證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキ

ハ「農商務卿」ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ卒業シタル者
或ハ外國ニ於テ獸醫ノ開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證
書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ「農商務卿」ハ其證
書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ府知事「縣令」ノ具狀ニヨリ「農商
務卿」ハ獸醫學術ノ試験ヲ經サル者ト雖モ其履歷ニヨリ假開業免
狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登録
シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニヨリ免狀ノ書
換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツヘ
シ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第十條 獸醫廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第十一條 獸醫其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ「農商務卿」其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條 前條ニ據リ獸醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ農商務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十三條 「農商務卿」ハ獸醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ勘査シ特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ

第十四條 官許ヲ得シテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

○獸醫開業試驗規則第十八年八月
今般第貳拾八號ヲ以テ獸醫免許規則布告相成候ニ付獸醫開業試驗規則左ノ通相定メ明治十九年三月一日ヨリ施行ス

獸醫開業試驗規則

第一條 獸醫ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試驗ヲ受クヘシ

第二條 「農商務卿」ハ毎年二回獸醫開業ノ試驗ヲ舉行スヘシ

但試驗ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試驗期日ハ六箇月前ニ告示スヘシ

第三條 「農商務卿」ハ主事者及ヒ試驗委員ヲ派遣シ試驗一切ノ事

ヲ監督整理セシムヘシ

但時宜ニ依リ地方官ニ委任シ其試驗ヲ執行セシムルコトアルヘシ

第四條 「農商務卿」ハ獸醫學術開業試驗ヲ舉行スル毎ニ官立及府

縣立ノ獸醫學校若シハ農學校ニアリテ獸醫學ヲ專修シタル者

又ハ地方ニ於テ名望アル獸醫學者等ヲ選ヒ試驗委員ヲ命スル

コトアルヘシ

第五條 獸醫學術試驗科目ハ左ノ如シ

- 第一 家畜解剖學
- 第二 全 生理學
- 第三 全 藥物學
- 第四 全 內科學
- 第五 全 外科學
- 第六條 獸醫學術ノ試験ヲ受ケント欲スル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月十五日迄ニ其書類ヲ取纏メ農商務省ニ進達スルモノトス
- 第七條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ選定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ
- 第八條 試験主事者ハ試験終ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ及第證書ヲ與フヘシ但及第證書ニハ主事者試験委員連署スヘシ
- 第九條 試験ニ落第シタル者ハ六箇月ヲ經ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得ス

○ 獸類傳染病豫防規則 明治十九年九月農商務省令第十一號

沿革略記

明治四年六月布告ヲ以テシベリヤ海岸ニリンドルベ
 スト流行ニ付家畜傳染病豫防法ヲ頒布ス○同年七月
 布告ヲ以テ大學東校ニ於テ譯述シタルリンドルベスト病論
 及豫防法等ヲ頒布ス○六年三月大藏省第貳拾五號達ヲ以テ
 北亞米利加ニ於テ馬病傳染流行ニ付其豫防法ヲ頒布ス○九
 年二月內務省乙第二十號達ヲ以テ傳染疫牛賠償撲殺法ヲ設
 ケ疫牛處分條例ヲ定ム○同年三月內務省乙第廿四號達ヲ以
 テ傳染牛疫豫防法並斃死後處置方ヲ定ム○同年九月內務省
 乙第百六號達ヲ以テ本省へ申出來リシ獸類劇症ノ發病斃死
 ノ景況等自今直ニ勸業寮へ通信セシム○十四年四月第貳拾
 五號達ヲ以テ農商務省ヲ設置シ牧畜事務ヲ同省ニ屬ス○十
 九年九月農商務省令第十一號ヲ以テ九年內務省乙第二拾號
 達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前ノ達類ヲ廢シ更ニ獸類傳
 染病豫防規則ヲ定ム是レ現行法ナリ

獸類傳染病豫防規則左ノ通制定シ明治二十年一月一日ヨリ施行ス
 但明治九年內務省乙第二十號達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前
 ノ達類ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

獸類傳染病豫防規則

第一條 此規則ニ稱スル獸類トハ牛馬羊豕ヲ謂ヒ傳染病トハ左ノ諸病ヲ謂フ

- 一 牛疫
- 二 炭疽熱
- 三 鼻疽及皮疽
- 四 傳染性胸膜肺炎
- 五 傳染性鵝口瘡
- 六 羊痘

第二條 獸類傳染病ニ罹リタルトキ若クハ其症候ノ疑アルトキハ所有者又ハ管理者ハ其患者ト健畜ト隔離シ獸醫ヲシテ患者及之ニ接近シタル獸類ヲ診察セシムヘシ

第三條 獸醫ハ獸類ヲ診察シ傳染病ト鑑定シタルトキハ所有者又ハ管理者ト連署シ直ニ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第四條 獸醫牛疫ト診斷シタルトキハ警察官吏及獸醫立會ノ上所有者又ハ管理者ニ於テ之ヲ撲殺スヘシ

第五條 第四條ノ場合ニ於テハ三人以上ノ評價ヲ以テ發病前ノ價格ヲ定メ所有者ニ左ノ手當金ヲ下付スヘシ

評價金二十五圓マテ	手當金評價十分ノ四
評價金五十圓マテ	同 十分ノ三
評價金百圓マテ	同 十分ノ二
評價金二百五十圓マテ	同 十分ノ一
評價金五百圓マテ	同 十五分ノ一
評價金千圓マテ	同 二十五分ノ一

第六條 獸醫傳染病蔓延ノ兆候アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第七條 第三條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ニ於テハ其旨ヲ患者所在ノ近傍ヘ榜示スヘシ

第八條 傳染病畜ノ全癒又ハ斃死シタルトキ若クハ傳染病畜ヲ撲殺シタルトキハ其所有者又ハ管理者ハ獸醫ノ診斷書ヲ添ヘ直ニ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第九條 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ傳染病ニ由リテ撲殺シタル獸類並ニ其排泄物及之レニ觸レタル飼料褥草等ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニ於テ燒棄スルカ又ハ消毒法ヲ施シ深六尺以上ノ坑ヲ掘リテ埋没スヘシ

但埋没シタル場所ハ十二箇年ノ後ニアラサレハ發掘スルヲ得ス
第十條 傳染病畜及其排泄物ニ觸レタル物品若クハ看護者ハ勿論其患者ノ在リシ場所ハ獸類ノ所有者又ハ管理者ニ於テ消毒法ヲ行フヘシ

第十一條 道路ニ於テ傳染病ニ罹リタル獸類若クハ其死體ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニアラサレハ轉移スルヲ許サス
第十二條 傳染病ノ流行ニ際シ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ獸

類市場ノ開設及斃牛馬化成ニ關スル營業ヲ停止スルヲ得

但本條ノ場合ニ於テハ停止又ハ解停ノ都度其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ

第十三條 第三條第六條第八條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ハ郡區役所ヲ經警察署ハ直ニ所轄廳警視廳北海道廳府縣廳ヲ云フニ届出ツヘシ

第十四條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示シ且近接ノ地方廳ニ報告スヘシ

但本條ノ報告ヲ得タル地方廳ハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示スヘシ

第十五條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第十三條ノ届ヲ得タルトキハ毎土曜日其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ

第十六條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキ及管下接近ノ地方ニ傳染病蔓延ノ兆候アリトノ報告ヲ得タルトキハ農商務大臣ノ允許ヲ得テ豫防線ヲ劃シ獸類ノ出入

往來ヲ停止スルヲ得

第十七條 牛疫蔓延ノ際ニ限り其患畜ニ接近シタル牛ハ假令健康ノモノダリトモ警視總監北海道廳長官府縣知事ニ於テ農商務大臣ノ允許ヲ經タル後之ヲ撲殺セシムルヲ得

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ評價金ノ全額ヲ下付スヘシ

第十八條 牛疫ヲ除クノ外傳染病蔓延ノ際ニ於テハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ農商務大臣ノ允許ヲ得タル後其患畜ヲ撲殺セシムルヲ得

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ手當金ヲ下付スヘシ
第十九條 此規則ニ違背シタル獸醫及獸類所有者又ハ管理者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス
但刑法ニ正條アルモノハ此限ニアラス

○第九類 救恤、褒賞

○棄兒養育米給與方明治四年六月
布告

從來棄兒救育ノ儀所預リノ分ハ養育米被下貰受人有之分ハ不被下候處自今預リ貰受ニ不拘棄兒當歲ヨリ十五歲迄年々米七斗ツ、被下候間實意養育可致事

○棄兒養育米及生年月日檢定方明治六年四月
第三百三十八號布告

棄兒養育米ノ儀辛未八月中相達候通十五歲迄年々米七斗宛下渡候處自今滿十二年ヲ限り被下候條生年月日見定ノ儀ハ其所戸長等立合身體骨格等篤ト檢査シ本年第三十六號布告ニ照シ年齡相定候様可致事

但(六年第三百四十號
布告ヲ以テ刪除)

六年第三十六號布告ハ年
齡計算ヲ幾年月トナス

○乘兒養育米代金引直下渡方內七年九月大藏兩省乙第五十六號連乘兒養育米ノ儀正米無之節ハ貢納石代直段ヲ以テ代金渡可致旨
 壬申年大藏省第四百五十五號ヲ以テ相達候處自今正米無之節ハ其
 地前月下米平均相場ヲ以テ渡方可取計此旨相達候事
 但本年十月一日ヨリ渡方本條ノ通可相心得事

○褒章條例明治十四年十二月
 第六十三號布告

沿革略記 明治二年七月達府縣奉職規則中ニ忠孝節義篤行者賞
 與取扱ヲ定メ其輕賞ハ府縣ニ委任シ重賞ハ稟裁ヲ經
 テ施行セシム○三年十一月達ヲ以テ前ニ令スル所ノ賞與金
 額ノ多寡及其取扱ヲ定ム○同年十二月辨官達ヲ以テ尙ホ賞
 與ノ緩急ヲ計リ其取扱方ヲ示ス○五年正月第拾二號達ヲ以
 テ三年十一月及十二月辨官達ヲ廢シ褒賞ハ事ノ細大ヲ論セ
 ス稟裁ヲ經テ施行セシムト雖モ賞與ノ時機ヲ失フノ虞アル
 モノハ輕賞ニ限り時機ノ處置ヲ示ス○八年七月第百二十一
 號達ヲ以テ篤行及ヒ奇特者賞與條例及ヒ學校病院其他道路
 橋梁及濟貧恤窮等ノ費用ヲ出スモノハ賞與規則ヲ定ム○十

四年十二月第六十三號布告ヲ以テ褒章條例ヲ制定ス是レ現
 行法ナリ

褒章條例別紙ノ通相定來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別紙)

褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナ
 ル者孝子順孫節婦義僕ノ類又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者疏河築隄修路墾田ノ業
或ハ貧院學校設立ノ類ヲ云フヲ表彰スル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フコトアルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都度飾版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス
(褒章ノ圖及佩用式略ス)

○褒章ト金銀木盃金圓賜リ方 明治十六年一月 第一號布告

明治十四年^{十二月} 第六拾三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄付シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ

○褒章條例取扱手續 第十四年十二月 第三號達
今般第六拾三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事

但明治八年^{七月} 第百貳拾壹號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候事
第一條 凡ソ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ

但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒章ヲ賜フノ限リニアラス
第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅委任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主コハ褒章ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ授與ノトキモ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ其公私備ニ係ル者ハ本條ニ同シ
第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レモ勅委任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ内務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ太政官ニ

上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

○第十類 鳥獸取締、蠶種検査

○鳥獸獵規則 明治十年一月 第一號布告

沿革略記

明治元年四月及九月達ヲ以テ猥リニ發砲鳥打等ヲテ農事ヲ妨グル者ノ取締ヲ爲ス○二年四月達ヲ以テ發砲ノ禁ヲ犯ス者ハ其器具ヲ沒收ス○三年五月達ヲ以テ郭内外諸邸宅中ニ於テ發砲ヲ禁ス○五年正月第二十八號布告銃砲取締規則第六則ヲ以テ銃獵ノ取締ヲ爲ス○六年一月第二十五號布告ヲ以テ鳥獸獵免許規則ヲ制定ス○同年三月第百拾號布告ヲ以テ前令ヲ改正シ更ニ鳥獸獵規則トナス○七年十一月第百二十二號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十年十一月第十一號布告ヲ以テ尙ホ之ヲ改正ス是レ現行法ナリ

鳥獸獵規則別紙ノ通改正候條此旨布告候事

(別紙)

鳥獸獵規則

第一條 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノタメニスルヲ遊獵トス

第二條 銃獵免狀ナキ者ハ總テ銃獵スルヲ禁ス但有害ノ鳥獸ヲ除ク
カメメニハ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ與フヘシ

第三條 銃獵免狀ヲ得ント欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢
ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ヘ差出スヘシ
(十四年第六十一號布告ヲ以テ農
務省トアルヲ警視廳ト改ム)

第四條 免狀ハ其効一期限ニ止ルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若ク
ハ授受スルヲ禁ス

第五條 免狀ヲ願受ル者ハ左ノ通免許稅ヲ納ムヘシ

一職獵稅

金壹圓

一遊獵稅

金拾圓

第六條 水火盜難其他ノ事故ニヨリ免狀ヲ毀失スル時ハ速ニ東京府
下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ニ届出ヘシ再ヒ免狀ヲ願受ル
者ハ更ニ稅金ヲ納ムルニ及ハスト雖モ手数料トシテ金貳拾五錢ヲ
納ムヘシ(十四年第六十一號布告ヲ以テ農
務省トアルヲ警視廳ト改ム)

第七條 左ニ記列シタル者ニハ免狀ヲ付與セサルヘシ

一拾六歳未満ノ者

一白痴風癲等ノ者

一故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者

第八條 左ニ記列シタル場所ニ於テハ銃獵ヲナスヲ禁ス

一都府市街ハ勿論衆人群集ノ場所

一銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所

一禁獵制札ノ場所

但制札ハ獵銃貳挺ヲ交叉シタル圖ノ下ニ銃獵禁制ノ四字ヲ記
シ掲ケ置クヘシ

一作物植付ケアル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内

但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第九條 獵銃ハ和銃玉目四匁八分以下並ニ西洋獵銃ニ限ルヘシ軍銃
ヲ用フルヲ禁ス

但「開拓使」管内ニ限り和銃玉目拾匁以下ヲ用フルヲ得ヘシ(十年第十五號布告ヲ以テ但書追加)

第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ一期トス是時限ノ外ハ銃獵ヲ禁ス

但地方ノ景況ニヨリ已ムヲ得ス此期限ヲ伸縮スル時ハ其理由ヲ農商務省ヘ届出ヘシ(十四年第四十三號布告ヲ以テ内務省トアルヲ農商務省ト改ム)

第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス

第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帯スヘシ出獵中警察官吏區戸長村役人等免狀ヲ看ント請フ者アル時ハ直ニ之ヲ示スヘシ

第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害トスル時ハ第八條所示ノ如キ制札ヲ建テ其周圍ニ繩張又ハ假圍ヲナスヘシ

第十四條 凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘシ
第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスシテ職獵ノ免狀ヲ受ケ遊獵スル者ハ五拾圓ノ罰金ヲ科シ免狀取上ケ其期內銃獵ヲ禁スヘシ

第十六條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ證據ヲ取り訴出ル時ハ犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フヘシ

第十七條 第十四條第十五條ノ外此諸規則ヲ犯ス者ハ三圓ヨリ少ナカラス貳拾圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

第十八條 「開拓使」管内ニ入り鹿獵ヲ爲ス者ハ該使施行ノ規則ニ遵フヘシ(十年第八十五號布告ヲ以テ追加)

漁獵ノ事務ハ十四年第九拾五號通ニ依リ農商務省管理ニ屬ス

○外國人銃獵免狀取扱條例十一年十月丙第五十三號通
當明治十一年度外國人銃獵免許ノ儀別紙ノ通り免狀並條約及ヒ渡方條例共改正候條此旨相達候事

(別紙) 外國人銃獵免狀取扱條例

第一條 銃獵免狀ハ別紙雛形ノ通り相製シ凡積ヲ以テ當省勸農局ヨリ相渡スヘシ

第二條 免狀下渡ノ節ハ外國人ヲシテ別紙雛形ノ通り條約書ニ記名調印セシメ各地方長官東京ニテハ警視本署長官モ同シノ記名調印シテ之ヲ該廳ニ留メ置キ免狀渡方取計フヘシ

第三條 銃獵ハ毎年十月十五日ヨリ翌年四月十五日迄ヲ以テ一期ト定メ滿期ノ節ハ約定面ノ通り免狀收却ノ上殘餘ノ分トモ總テ該廳ニ於テ斷裁致スヘシ

第四條 免狀渡濟ノ上ハ總計表ヲ製シ翌年七月限り當省勸農局ニ差出スヘシ

第五條 免狀不申受銃獵セシ者有之節ハ該獵者ヲ取押ヘ成丈ケ證據取置其始末詳細領事ニ訴出ヘシ

第六條 銃獵免狀ヲ領受セシ者ハ條約規程内ハ自他管内ヲ問ハズ總テ免許ノ効アルモノトス

第七條 免狀付與スル節ハ免狀料トシテ金十圓ヲ收入スヘシ但遺失毀傷等ニ因リ免狀再渡ヲ乞フ時ハ手數料トシテ金貳拾五錢ヲ收入スヘシ(十二年丙第廿四號達ヲ以テ但舊改正)

○朝鮮人鳥獸獵免狀取扱方十六年十月農商務省第十二號達本邦在留朝鮮人鳥獸獵免狀ヲ請求スルキハ遊獵免狀ヲ下附シ總テ内國人同様處分候儀ト可相心得此旨相達候事

○北海道鹿獵規則明治十一年六月開拓使乙第二十號布達

沿革略記 明治九年十一月開拓使乙第十一號布達ヲ以テ鹿獵規則ヲ定ム○十一年六月同使乙第二十號布達ヲ以テ前令ヲ改正ス是レ現行法ナリ

明治九年十一月乙第拾壹號布達當「使」管内鹿獵規則別紙ノ通改定候條此旨布達候事

(別紙)

北海道鹿獵規則

鹿ハ北海道物産ノ一ニシテ其利タル尠シトセス然ルニ從來獵法制限ナキニ因テ妄獵濫殺繁殖ノ法ヲ缺クノミナラス自然其種ヲ減シ其聲價ヲ落シ人民モ亦遂ニ其利ヲ失フニ至ラントス故ニ之ヲ保護シ永ク其利ヲ失ハサラシメンカ爲メ茲ニ規則ヲ設クルヲ左ノ如シ

第一條 免許鑑札ナクシテ鹿獵ヲ爲スハ自今之ヲ禁ス

第二條 鹿獵志願ノ者ハ左ノ書式ニ照準シ地方廳札幌本廳及ヒ函館以下之ニ倣フ願書差出シ免許鑑札ヲ受ク可シ

十四年第八號布告ヲ以テ開拓使ヲ廢シ三縣ヲ置ク十九年第一號布告ヲ以テ函館札幌根室ノ三縣ヲ廢シ更ニ北海道廳ヲ置ク

第三條 鑑札ヲ受クルニハ職獵ハ一枚ニ付金貳圓五拾錢ツ、遊獵ハ一枚ニ付金五圓ツ、獵稅ヲ納ムヘシ

但舊蝦夷人ノ職獵ハ當分稅納ニ及ハス

第四條 獵者ノ員ハ年々札幌「本廳」管内職獵五百名遊獵三十名函館「支廳」管内職獵百名遊獵十名根室「支廳」管内職獵百三十名内三十名冬獵百名夏遊獵十名内五名夏獵ト定メ滿員ノ後願出ル者ハ鑑札ヲ與ヘス（十一年開拓使乙第二十一號布達ヲ以テ根室支廳管内職獵夏冬獵員ヲ改ム）

但シ十勝國及釧路國一圓並ニ膽振國勇拂郡植苗村字美々ヨリ四方へ四里ツ、ハ鹿種繁息ノ爲メ該地在籍舊土人ノ外ハ當分出獵スルヲ許サス（十三年三月開拓使上申ヲ以テ但書改正）

第五條 免許鑑札ヲ受ケタル者ト雖モ毒矢ヲ以テ獵殺スルヲ禁ス

第六條 鑑札ハ一期限ノミ効アリトス且一己ノ用ト爲スヘキモノニシテ貸借賣買讓受スルヲ禁ス

第七條 獵業ハ根室國一圓並北見國ノ内網走紋別常呂釧路ノ四郡ハ

五月一日ヨリ十月三十一日マテ其他ハ九月一日ヨリ翌年二月二十八日閏年ハ二マテ一期限トシ右期限ノ外ハ出獵ヲ禁ス

但免許鑑札ハ毎年三月五日限り最初受取タル地方廳へ返納スヘシ

鳥獸獵規則ハ本類ニ載ス

第八條 鑑札ヲ與フヘカラサルモノ及ヒ銃獵禁制ノ場所ハ鳥獸獵規則第七條同第八條ノ通りタルヘシ

第九條 此規則ヲ犯ス者ノ罰則等ハ總テ鳥獸獵規則第十四條ヨリ第十七條マテノ通タルヘシ

（願書式略之）

○

○北海道臘虎并膾肭獸獵獲ノ禁明治十七年五月第拾六號布告

自今北海道ニ於テ臘虎并膾肭獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三

百七十三條ニ照シテ處斷シ仍ホ其獵獲物ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス

但「農商務卿」ノ特許ヲ得タル者ハ此限ニゾラス

○ 臘虎並臘肭獸獵獲及其生皮輸入販賣規則 明治十九年十二月勅令第八十號
朕臘虎並臘肭獸獵獲及其生皮輸入販賣規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臘虎並臘肭獸獵獲及其生皮輸入販賣規則

第一條 明治十七年第十六號布告但書ニ據リ農商務大臣ノ特許ヲ得タル者ハ北海道廳ノ定メタル獵獲期限獵場區域内ニ於テ臘虎并ニ臘肭獸ノ獵獲ニ從事スヘシ
但獵獲ニ從事スルトキハ常ニ其特許狀ヲ携帯シ海陸何レノ場合

ヲ問ハス獵獲監視官吏又ハ警察官吏ニ於テ檢閲センコトヲ求ムルトキハ直ニ之ヲ示スヘシ

第二條 臘虎并ニ臘肭獸ノ獵獲ニ從事スル者北海道ニ至リタルトキハ獵船ノ名、噸數、乘組人名ヲ北海道廳指定ノ出張所ニ届出該道廳ニ於テ獵獲船ノ爲メ特ニ定メタル徽章ヲ常ニ船檣又ハ其他船部ノ見易キ位置ニ掲クヘシ

第三條 臘虎并ニ臘肭獸ノ生皮ヲ賣却セントスル者ハ之ヲ第二條ニ記載セル出張所ニ差出シ當該官吏ノ檢印(烙印ヲ用ユルモ妨ナシ)ヲ受クヘシ其檢印ナキモノハ之ヲ賣却スルコトヲ得ス

第四條 前條當該官吏ノ檢印ナキ臘虎并ニ臘肭獸ノ生皮ヲ帝國諸港ニ輸入シ若クハ船舶ニ積載シテ帝國諸港内ニ滯泊シ又ハ市場ニ販賣シ或ハ販賣セントスル者ヲ發見スルトキハ稅關官吏又ハ警察官吏ニ於テ該物品ヲ取押ヘ直ニ告發スヘシ

但露西亞國及北亞米利加合衆國所轄内ニ於テ其政府ノ免許ヲ得

テ獵獲シタル臘虎并ニ臘豚獸ノ生皮ニ於テハ船主又ハ船長タル者其國相當官吏ヨリ付與セシ證書若クハ本邦在留露國及合衆國領事ノ證明書ヲ差出シタル後該品ヲ帝國内ニ輸入スルコトヲ得

○屠牛取締明治四年八月
大藏省布達

近來肉食相開候ニ就テハ屠牛渡世ノ者屠場ノ儀ハ人家懸隔ノ地ニ取設ケ病牛死牛トモ不賣鬻樣嚴重取締可申就テハ左ノ二ヶ條相守各地方官ニ於テ雛形ノ鑑札製造致シ屠場取開ノ場所巨細取調ノ上相渡シ「當省」へ追テ可届出事

一牝牛ハ蓄息ノ基本ニ付總テ屠殺不致樣取締可致事
但十二三歳以上孕牛ニ難相成分ハ不苦候事

牧畜ノ事務ハ十四年改訂
拾五號達ヲ以テ農商務省
ニ屬ス

一諸開港場ニ於テ輸出ノ節取締ノ儀ハ其地方官ニ於テ見込相立取締可致事

但見込ノ趣追テ可申出事
右ノ通候事

(免許鑑札雛形略之)

○牝牛屠殺取締六年十一月
大藏省第百五十七號達
近來肉食相開候ニ付テハ牛種蓄息ノ儀ハ最注意不致候テハ不相成ニ付辛未八月中牝牛屠殺取締ノ儀及布達候處兎角目下ノ細利ニ趨リ小壯ノ牝牛屠殺販賣ノ者モ有之哉ニ相聞此儘差置候テハ將來牛種減耗ニ立到リ殖産ノ上ニ於テ不容易妨害可相成ニ付右布達ノ旨意ニ基キ管内牝牛屠殺取締方法相設其旨租稅察へ可届出此旨相達候事

○蠶種検査規則 明治十九年八月
農商務省令第九號

蠶種微粒子病(一名黑痣病)豫防ノ爲蠶種検査規則左ノ通相定メ原種ノ検査ハ明治二十年検査期ヨリ施行シ製絲用種ノ検査ハ同二十一年検査期ヨリ施行ス

蠶種検査規則

第一條 凡ソ蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣セントスル者ハ管轄廳ニ願出テ鑑札ヲ受クヘシ

第二條 蠶種ヲ製造スル者ハ此規則ニ從ヒ其検査ヲ受クヘシ

第三條 検査證印ナキ蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第四條 蠶種検査所ハ管轄廳ニ於テ管内便宜ノ地ニ之ヲ設置スヘシ但地方ノ狀況ニ由リ巡迴検査ヲナスモ妨ケナシ

第五條 蠶種検査員ハ管轄廳ニ於テ之ヲ命スヘシ

但検査ノ方法ハ別ニ訓令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 春蠶種ノ検査ハ毎年十月一日ヨリ始メ夏蠶種秋蠶種ノ検査

期日ハ管轄廳ニ於テ適宜之ヲ定ムルモノトス

第七條 蠶種ヲ製造スル者ハ春蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造額ヲ毎年七月三十一日マテニ夏蠶種秋蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造豫算額ヲ検査期日ヨリ三十日以前ニ管轄廳ニ届出ツヘシ

第八條 蠶種ニハ製造人ノ住所氏名又ハ會社若クハ組合ノ名稱ヲ記シ之ヲ原種販賣用種ノ製造ト製絲用種トニ區別シテ検査所ニ差出スヘシ

第九條 病毒ノ歩合原種ニ於テハ百分ノ五以下製絲用種ニ於テハ百分ノ十五以下ノモノニ検査證印ヲ付シ其以上ニ及フモノニハ都テ廢棄證印ヲ付スルモノトス

第十條 廢棄證印アル蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第十一條 蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣スル者廢業スルカ他ノ管轄地ニ寄留若クハ轉籍スルトキハ其旨ヲ管轄廳ニ届出テ鑑札ヲ返納スヘシ

但寄留若クハ轉籍地ニ於テ營業セントスルトキハ第一條ニ據ル
ヘシ

第十二條 第一條第三條第十條ニ違ヒタル者ハ一圓以上二十五圓以
下ノ罰金ニ處ス

○第十一類 商事、專賣

○國立銀行條例明治九年八月
第六號布告

沿革略記 明治五年十一月第三百四十九號布告ヲ以テ國立銀行
條例并成規ヲ定ム○九年八月第六號布告ヲ以テ國
立銀行條例并成規ヲ改定ス是レ現行法ナリ

明治五年^{十一月} 第三百四十九號布告國立銀行條例ノ儀詮議ノ次第有之
別冊ノ通改正致シ舊條例ハ自今相廢シ候條新ニ國立銀行ヲ創立セン
トスル者ハ勿論從來舊條例ヲ遵奉シテ創立シタル者ト雖モ右改定條
例ニ準據シ大藏省ヘ出願ノ上其免許ヲ受ケ候様可致此旨布告候事
(國立銀行條例并成規略之)

十一年第五號布告ヲ以テ
國立銀行條例第十八條改
正
十一年第三十一號布告ヲ
以テ國立銀行條例第五十
七條改正
十二年第三號布告ヲ以テ
國立銀行成規第二十四條
改正

○國立銀行稅額明治十一年九月
第二十九號布告

明治九年^{八月} 第六號布告國立銀行條例第十五章稅額ノ儀ハ銀行
紙幣下付高ノ千分ノ七ト相定メ本年七月ヨリ年々徵收候條此旨

布告候事

但納期ノ儀ハ一個年兩度ニ割合前半年分ハ七月三十一日限り
後半年分ハ一月三十一日限り其管轄廳へ可相納事

○銀行紙幣壹圓札新製發行明治十年十二月
第九十號布告

今般新ニ銀行紙幣壹圓札ヲ製造シ從前ノ銀行紙幣ト取交セ國立
銀行へ交付令發行候條公債證書ノ利足ト海關稅ヲ除クノ外租稅
其他一切公私ノ取引上總テ無疑念授受可致尤モ新立ノ銀行ヨリ
令發行候節ハ其時々「大藏卿」ヨリ可及布達此旨布告候事

但見本札ノ儀ハ其管轄廳ヨリ可相達事

○銀行紙幣五圓札新製發行明治十一年七月
第十六號布告

今般新ニ銀行紙幣五圓札ヲ製造シ從前ノ銀行紙幣ト取交セ各國
立銀行へ交付令發行候條公債證書ノ利息ト海關稅ヲ除クノ外租
稅其他一切公私ノ取引上總テ無疑念授受可致此旨布告候事
但見本札ハ其管轄廳ヨリ可相達事

○鎖店國立銀行ノ貸金證書債主ノ權利ヲ定ム十七年十二月
十四號
告示

鎖店國立銀行ノ貸金其他ノ證書中跡引受ハテシテ左ノ書式ノ裏
書又ハ繼書ヲナシ處分爲致候モノハ爾後裏書又ハ繼書ノ記名主
之カ債主タルヘシ依テ右證書ニ對スル負債ハ該負債者ヨリ右記
名主ニ向ヒ濟方可致者トシ(裏書繼書々式略之)

○銀行會社ノ廣告ハ官報掲載ヲ請フヲ得十八年八月
第十八號布達

銀行會社等ノ報告類ニシテ法律規則若クハ其定款ニ因リ廣告ヲ
要スルモノハ自今官報ニ掲載ヲ請フコトヲ得但其取扱手續ハ官
報局長ヨリ公告スヘシ(十九年六月閣令第十八號ヲ以テ廢
止總官トアハチ官報局長ト改ム)

○日本銀行條例明治十五年六月
第三十二號布告

日本銀行條例左ノ通制定ス

日本銀行條例

第一條 日本銀行ハ有限責任トシ本行ノ負債辨償ノ爲メ株主ノ負擔

スヘキ義務ハ株金ニ止マルモノトス

第二條 日本銀行ハ本店ヲ東京ニ置クヘシ各府縣ノ首邑其他要用ナル地方ニ支店出張所ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コルレスボンデンス」ヲ締約スルコトヲ得但支店出張所ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コルレスボンデンス」ヲ締約スルルキハ其事由ヲ「大藏卿」ニ具狀シテ其許可ヲ受クヘシ又「大藏卿」ニ於テ支店出張所ヲ要用ナリトスル時ハ銀行ニ命シテ之ヲ設置セシムルコトアルヘシ

第三條 日本銀行ノ營業年限ハ開業ノ日ヨリ滿三十年トス但株主總會ノ決議ニ依リ營業ノ延期ヲ請願スルコトヲ得

第四條 日本銀行ノ資本金ハ壹千萬圓ト定メ之ヲ五萬株ニ分チ一株貳百圓トス但株主總會ノ決議ニ依リ資本金ノ増加ヲ請願スルコトヲ得

第五條 日本銀行ノ株券ハ總テ記名券トナシ日本人ノ外賣買讓與スルヲ許サス

第六條 日本銀行ノ株主トナラントスルモノハ「大藏卿」ノ許可ヲ受クヘシ

第七條 資本金總額五分ノ一即チ貳百萬圓ノ入金アル時ハ營業ヲ開始スルヲ得ヘシ但資本金募集ノ手續ハ定款ヲ以テ定ムル者トス

第八條 營業上ニ於テ損失ヲ生シ資本現入金額ノ内幾分ヲ減少シタル時ハ其事由ヲ審明シ資本入金殘額ヨリ其欠額ニ充ル迄ノ金額ヲ追募スヘシ

第九條 事業ノ伸張ニ由リ資本入金ノ増加ヲ要スル時ハ之ヲ資本入金殘額ヨリ追募スヘシ

第十條 純益金總額ヨリ株主割賦金ヲ引去リ其殘額ヨリ少クモ十分ノ一ヲ左ノ目的ヲ以テ積立金ト爲ス可シ

第一 資本金ノ損失ヲ補フ

第二 割賦金ノ不足ヲ補フ

第十一條 日本銀行ノ營業ハ左ノ如シ

- 第一 政府發行ノ手形爲換手形其他商業手形等ノ割引ヲ爲シ又ハ買入ヲ爲ス事
 - 第二 地金銀ノ賣買ヲ爲ス事
 - 第三 金銀貨或ハ地金銀ヲ抵當トシテ貸金ヲ爲ス事
 - 第四 豫テ取引約定アル諸會社銀行又ハ商人ノ爲メニ手形金ノ取立ヲ爲ス事
 - 第五 諸預リ勘定ヲ爲シ又ハ金銀貨貴金屬並諸證券類ノ保護預リヲ爲ス事
 - 第六 公債證書政府發行ノ手形其他政府ノ保證ニ係ル各種ノ證券ヲ抵當トシテ當座勘定貸又ハ定期ヲ貸爲ス事但其金額及利息ノ割合ハ總裁副總裁理事監事ニ於テ時々決議シ「大藏卿」ノ許可ヲ受クヘシ
- 第十二條 日本銀行ハ第十一條ニ記載スル事業ノ外左ニ掲クル件々ハ勿論其他諸般ノ營業ニ關涉スルコトヲ得ス

- 第一 不動産及ヒ銀行又ハ諸會社ノ株券ヲ抵當トシテ貸金ヲ爲ス事
- 第二 本銀行ノ株券ニ對シテ貸金ヲ爲シ又ハ此株券ノ買戻ヲ爲ス事
- 第三 諸工業會社ノ株主タルハ勿論直接間接ヲ問ハス工業ニ關係スル事
- 第四 本支店出張所ヲ開設スル爲メ必要ナル者ノ外一切他ノ不動産ノ所有主タル事
- 第十三條 政府ノ都合ニ由リ日本銀行ヲシテ國庫金ノ取扱ヒニ從事セシムヘシ
- 第十四條 日本銀行ハ兌換銀行券ヲ發行スルノ權ヲ有ス但此銀行券ヲ發行セシムル時ハ別段ノ規則ヲ制定シ更ニ頒布スル者トス
- 第十五條 日本銀行ハ諸手形及切手ヲ發行スルヲ得ヘシ
- 第十六條 日本銀行ハ公債證書買入又ハ之ヲ賣拂フヲ得ヘシ但此

場合ニ於テハ「大藏卿」ノ許可ヲ受クヘキモノトス

第十七條 日本銀行ハ總裁一人副總裁一人理事四人ヲ以テ綜理スル者トス此外ニ監事三人乃至五人ヲ置クヘシ

第十八條 總裁副總裁ハ任期五ケ年トシ總裁ハ勅任副總裁ハ奏任トス但任期中ハ他ノ官職ヲ兼任スルヲ得ス

第十九條 理事ハ株主總會ニ於テ撰舉シ「大藏卿」ノ命スル者トス但創立第一回ハ五ケ年ノ任期ヲ以テ「大藏卿」之ヲ特命スヘシ監事ハ

株主總會ニ於テ之ヲ撰舉シ理事監事ノ任期ハ定款ヲ以テ定ムヘシ
第二十條 理事監事ハ任期中他ノ銀行又ハ會社等ノ役員タルヲ許サス

第二十一條 「大藏卿」ハ特ニ監理官ヲ日本銀行ニ派出シテ諸般ノ事務ヲ監視セシムヘシ

第二十二條 日本銀行ハ本文店出張所及約定店等ノ營業上百般ノ景況ヲ調査シ少クモ毎月一回之ヲ「大藏卿」ヘ報告ス可シ

第二十三條 日本銀行ハ本條例ノ旨趣ニ基キ銀行定款ヲ作り政府ノ許可ヲ受クヘシ但定款ヲ改正シ又ハ定款外ノ事件ヲ處スル時ハ株主總會ニ於テ決議シ政府ノ許可ヲ受ク可シ

第二十四條 政府ハ日本銀行諸般ノ業務ヲ監督シ其營業上條例定款ニ背戾スル事ハ勿論政府ニ於テ不利ト認ル事件ハ之ヲ制止スヘシ

第二十五條 此條例ヲ改正増削スル時ハ其施行ノ日ヨリ三個月以前ニ之ヲ布告スヘシ

○

○兌換銀行券條例 明治十七年五月 第拾八號布告

兌換銀行券條例別紙ノ通制定シ明治十七年七月一日ヨリ施行ス
但明治七年九月第百號布告ハ此條例布告ノ日ヨリ滿一箇年ノ後廢止ス

(別紙)

兌換銀行券條例

- 第一條 兌換銀行券ハ日本銀行條例第十四條ニ據リ同銀行ニ於テ發行シ銀貨ヲ以テ兌換スルモノトス
- 第二條 日本銀行ハ兌換銀行券發行高ニ對シ相當ノ銀貨ヲ置キ其引換準備ニ充ツヘシ
- 第三條 兌換銀行券ノ種類ハ壹圓五圓拾圓貳拾圓五拾圓百圓貳百圓ノ七種トス但「大藏卿」ハ各種ニ就テ其發行高ヲ定ムヘシ
- 第四條 兌換銀行券ハ租稅海關稅其他一切ノ取引ニ差支ナク通用スルモノトス
- 第五條 兌換銀行券ハ「大藏卿」ノ指定スル書式圖形ニヨリ日本銀行ニ於テ之ヲ製造シ時々其製造高ヲ「大藏卿」ニ上申スヘシ但其見本ハ發行期日前「大藏卿」ヨリ告示スヘシ
- 第六條 兌換銀行券ノ引換ヲ請フ者アルトキハ日本銀行本店及

- ヒ支店ニ於テ營業時間中何時ニテモ兌換スヘシ
- 但支店ニ於テハ本店ヨリ準備金ノ到達スヘキ時間其兌換ヲ延期スルコトヲ得(十八年第九號布告)
(其以テ但書追加)
- 第七條 金銀貨ヲ持參シテ兌換銀行券ニ引換ンコトヲ請フモノアルトキハ日本銀行本店及ヒ支店ニ於テ無手数料ニテ之ヲ交換スルモノトス
- 第八條 日本銀行ハ兌換銀行券發行ニ關シ出納日表及ヒ精算月表ヲ作り之ヲ「大藏卿」ニ報告スヘシ
- 第九條 「大藏卿」ハ日本銀行監理官ヲシテ特ニ兌換銀行券發行ノ件ヲ監督セシムヘシ但監理官ニ於テ必要ナリトスルトキハ何時ニテモ其手許有高及ヒ帳簿ヲ檢査スルコトヲ得
- 第十條 兌換銀行券ノ染汚毀損等ニヨリ通用シ難キモノハ日本銀行本店及ヒ支店ニ於テ無手数料ニテ之ヲ引換フヘシ
- 第十一條 兌換銀行券ノ製造、損券引換及ヒ消却等ノ手續ハ「大

藏卿一之ヲ定ムヘシ
第十二條 兌換銀行券ノ偽造變造ニ係ル罪ハ刑法偽造紙幣ノ各
本條ニ照シテ處斷ス

○兌換銀行券價造描改ニ係ル分取扱方十九年九月大藏省令第二十八號
日本銀行ニ於テ發行セシ兌換銀行券ノ價造及描改ニ係ル分取扱方
ノ儀ハ渾テ明治九年四月第五十七號布告價造金銀銅貨紙幣等取扱
規則及同年五月常省甲第十二號布達ニ準據スヘシ
但第五十七號布告取扱規則第二條ノ場合ニ於テハ日本銀行本
支店ヘ引換ヲ請フヘシ

九年第五十七號布告價造
金銀銅貨紙幣等取扱規則
及同年大藏省甲第十二號
布達價造紙幣取扱方ハ第
六類ニ載ス

○米商會所條例明治九年八月
第五百五號布告

沿革略記 明治七年十二月第百三十八號布告ヲ以テ從來各地方
米油限月賣買ヲ差止メ自今會社ヲ結ヒ米穀賣買相

場取引ヲ爲サントスル者ハ是歳十月第百七號布告株式取引
條例ノ方法ニ倣ヒ會社規則取調其管轄廳ヲ經テ大藏省ヘ出
願許可ヲ得ヘキモノトス○九年八月第百五號布告ヲ以テ更
ニ米商會所條例ヲ制定ス是レ現行法ナリ

從來各地方ニ於テ差許置候米油限月賣買一切差止メ自今米穀賣買相
場取引致度者ハ會社規則取調可願出旨明治七年十二月第百二十八號ヲ
以テ布告候處今般更ニ米商會所條例別冊ノ通相定候條營業致度者ハ
右ニ照準可願出此旨布告候事

(別冊)

米商會所條例

第一條 緒言

第一節 米商會所ハ米穀流通ノ爲メ米商人ノ集會シテ賣買取引ヲ爲
ス所ナリ而シテ協同結社之ヲ創立セントスル者ハ「農商務卿」ノ免
許ヲ請フヘシ(十四年第三十一號布告ヲ以テ本條例中ニ內務省及內
卿又ハ大藏卿トアルハ都テ農商務省及農商務卿ト改
倣以下)

第二節 「農商務卿」ハ地方ノ景狀ヲ察シ之ヲ創立スルノ緊要ナルヤ
ヲ考定シ之ヲ許可スルト否トノ權ヲ有ス

第三節 米商會所營業ハ五ケ年ヲ以テ一期ト定ム右滿期ノ際猶之ヲ
保續セント望ム者ハ更ニ其趣ヲ申立「農商務卿」ノ免許ヲ請フヘシ

第二條 會所創立ノ手續

第一節 米商會所ヲ創立スルニハ發起人十人以上ニシテ資本金ノ總
額三萬圓以上タルヘシ

第二節 資本金ハ百圓ヲ以テ一株ト定メ發起人總員ニテ必資本金總
高ノ半額以上ニ當ル株數ヲ所持スヘシ

第三節 會所ノ發起人ハ創立願書ニ此會所ヲ創立セントスル地方ノ
從來米穀聚散ノ實況及ヒ將來賣買ノ目的ヲ詳悉シ各記名調印シ區
戸長ノ奥書ヲ得會所創立證書及定款申合規則等ヲ添ヘ之ヲ地方官
廳ヘ差出スヘシ

但創立證書中株主ノ責任ニ於テ有限或ハ無限ナルヲ明記スヘ

シ(十二年第四號布告)
ヲ以テ但書追加)

第四節 地方官廳ニ於テハ願人共ノ身元行狀ヲ檢知シ且其目的ノ利
害障礙ノ有無ヲ識別シ又會議所等ノ設ケアル地方ニ於テハ其集議
ヲ取り併セテ之ヲ參酌シ相當ト思量スルキハ意見書ヲ添ヘ「農商
務卿」ヘ具申スヘシ

第三條 開業ノ手續

第一節 發起人等ニ於テ會所創立ノ許可ヲ受ケタル時ハ直ニ其旨ヲ
新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告シテ他ノ株主ヲ募ルヲ
得

第二節 發起人ハ其募ニ應シタル株主等ト共ニ集會ヲ爲シ第五條ノ
程限ニ從ヒ五人以上ノ肝煎及ヒ正副頭取ヲ選任シ其住所姓名年齢
等ヲ詳記シタル書面ヲ以テ地方廳ヲ經由シ「農商務卿」ノ認許ヲ受
クヘシ「農商務卿」ハ時トシテ其改撰ヲ命スルコトアルヘシ(十三年第
告ヲ以テ改正)

第三節 此頭取肝煎等ハ資本金總高ノ二分一ニ當ル現金或ハ日本政
府ノ公債證書此公債證書ハ時々相場ノ昂低ヲ以テ増減スヘシト雖モ
明治七年大藏省乙第廿八號達ノ價格ヨリ減少スヘカ
ラナ其地方管廳或ハ國立銀行ニ預ケ公正ナル預リ證書ヲ乞受ケ其
寫ヲ「農商務卿」ニ差出シ開業免狀ヲ請求スヘシ

第四節 會所ニ於テ開業免狀ヲ受ケタル上ハ其免狀ノ寫ヲ添ヘ何月
何日ヨリ其商業ヲ創ムヘキ旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上
ニ公告シ始メテ之ニ從事スルヲ得

第四條 社印ノ用方并印鑑差出方等ノ手續

第一節 開業免狀ヲ得テ其商業ヲ創メントスルニ當リ會所ノ印ヲ刻
シ頭取以下諸役員ノ印ト共ニ其印影ヲ一纏メニシテ「農商務卿」ニ
差出スヘシ若シ改刻スル者アルキハ其都度之ヲ差出スヘシ

第二節 會所ノ諸願伺届又ハ諸證書約定書及ヒ往復ノ文書等ニ至ル
マテ會所一般ニ關スル事ハ其會所ノ名義ヲ用井會所ノ印ヲ捺シ頭
取肝煎等之ニ署名加印スヘシ

第五條 役員ノ程限

第一節 會所ノ役員ト稱スル者左ノ如シ

頭取

副頭取

肝煎

以下支配人書記等ノ名義ヲ以テ役員ヲ定ムルハ會所ノ都合ニ任
ス

第二節 會所ノ役員タル者ハ該會所ニ於テ賣買本人又ハ仲買人ト爲
ルヲ許サス

第三節 右役員ハ株主ノ定例總集會ノ節投票ヲ以テ十株以上ヲ所持
シタル株主中ヨリ肝煎ヲ撰舉シ肝煎ハ其同僚中ヨリ正副頭取ヲ推
撰シ共ニ其住所姓名年齢等ヲ詳記シタル書面ヲ以テ地方廳ヲ經由
シ「農商務卿」ノ認許ヲ受テ新舊交代セシムヘシ「農商務卿」ハ時トシ
テ其改撰ヲ命スルヲアルヘシ(十三年第十九號
布告ヲ以テ改正)

第六條 役員ノ職務

第一節 頭取ハ會所ノ事務ヲ總轄シ他ノ役員ヲ指揮シ會所一切ノ責ニ任ス

第二節 頭取ハ肝煎分掌ノ事務ヲ定ムヘシ

第三節 副頭取ハ頭取ヲ助ケテ其事務ヲ共成シ時トシテハ其代理ノ任ニ當ルヘシ

第四節 肝煎ハ支配人書記等ノ役名ヲ議定シ其者等分掌ノ課程及ヒ俸給ヲ定メ社中差違ノ事ヲ判決シ金穀ノ出納ヲ管理シ株主ノ衆議ヲ取ラントスル事柄アル時ハ之ヲ招集スルコトアルヘシ

第五節 肝煎ハ毎月何回ト定メタル會議ノ議員トナルヘシ

第六節 肝煎ハ其同僚中又ハ頭取ニ於テ職任ニ不適當ノ行ヒアルカ又ハ之ヲ怠ル者アルキハ臨時委員ヲ定メ次ノ肝煎會議ノ日ニ無名投票ヲ以テ三分ノ二以上ノ説ニ從ヒ之ヲ退職セシムルコトヲ得

第七條 株主ノ權利制限及株式讓渡ノ手續

第一節 株主ハ會所ノ本主ニシテ會所資本ノ一部ヲ入金シ其入金高ニ應シタル株券ヲ所持シ以テ株數相當ノ權利ヲ有シ營業上ノ損益ヲ負擔スル者ナルカ故ニ時々ノ景況ニ着目シ金員及ヒ出納勘定帳簿ヲ檢閲セント求ムルノ權アリ

第二節 株主ハ肝煎ノ承諾ヲ得テ仲買人ト爲ルヲ得其場合ニ於テハ別段證人ヲ要セスト雖モ通常仲買人タルノ條件ニ適應スルヲ要ス
(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第三節 株主ハ何等ノ事故アルトモ會所解散ノ期ニ至ラサル時間ハ其株金ヲ取戻スコトヲ得ス

第四節 株主ハ肝煎ノ承認ヲ受タル上ニテ其所持ノ株式ヲ賣渡シ讓與ヘ又ハ質入抵當ト爲スコトヲ得ヘシ但其質入抵當ト爲シタル時間ハ總會議事ノ時發言ノ權ナク又役員ノ撰舉ニ應スルコトヲ許サス

第五節 株主其所持ノ株式ヲ賣渡シ又ハ讓與ヲ爲ス時ハ其賣買授受雙方ヨリ連印ノ證書ヲ會所ニ差出スヘシ會所ハ此證書ヲ受取リタ

ル時ニ株主帳ノ姓名ヲ書改ムヘシ若シ右手續ヲ爲サ、ル間ハ證書
賣買授受ノ効ナキ者トス

第八條 仲買人入社ノ手續

第一節 仲買人タルヲ得ヘキ者ハ丁年ニシテ會所々在ノ地ニ於テ滿
一年以上米商營業ヲ爲シタル者ニ限ル而シテ仲買人トナラント欲
スル者ハ身元金千圓以上ヲ出シ株主二名以上ノ保證ヲ以テ肝煎ニ
申出テ其承認ヲ得タル上地方廳ヲ經由シテ仲買人トナラントスル
願書ヲ「農商務卿」ニ捧ケテ其認許ヲ受クヘシ(十三年第十九號
布告ヲ以テ改正)
身元金ハ現金又ハ日本政府ノ公債證書ヲ以テ會所ニ預ケ置クヘシ
(十三年第十九號
布告ヲ以テ改正)

第二節 仲買人タルモノハ他人ノ依頼ヲ受ルニアラザレハ賣買取引
ヲナスコトヲ得ス其賣買取引ニ付會所ニ對シ自己ノ名義ヲ以テシ
其賣買取引上一切ノ責任ヲ負擔スヘシ但一口ノ取引ニ付賣買雙方
ノ依頼ヲ受クルヲ得ス(十五年第二十六號
布告ヲ以テ改正)

第三節 仲買人ハ五名ヲ一組トシ組合中ヨリ一名ヲ推撰シ肝煎ノ承
認ヲ得テ組頭ト爲シ組合中一切ノ取締ヲ爲サシムヘシ(十三年第十
九號布告ヲ
以テ
改正)

第四節 仲買人退社セントスルキハ其旨趣ヲ書面ヲ以テ肝煎ニ申出
ヘシ肝煎ハ之ヲ受ケテ十日間之ヲ會所ニ張出シ置キ會所ニ連帶シ
タル計算上ノ關係ヲキテ認メタル上ニテ其退社ヲ許シ身元金ヲ返
付シテ證人ノ責任ヲ解クヘシ

第九條 商會所一般ノ規則

第一節 外國人ヲ株主并仲買人ト爲スコトヲ得ス(十五年第廿六號
布告ヲ以テ改正)

第二節 會所ニ於テ賣買取引ヲ爲スモノハ其會所ノ仲買人ニ限ルヘ
シ(十五年第廿六號
布告ヲ以テ改正)

第三節 會所ニ於テハ貸附金ヲナスヘカラス又仲買人ノ身元金及證
據金ヲ使用スヘカラス(十五年第廿六號
布告ヲ以テ追加)

第四節 會所ハ此條例ノ旨趣ニ基キ賣買主雙方ノ約定ヲ履行セシム

ルノ責任アルモノトス(十五年第廿六號 布告ヲ以テ追加)

第五節 會所ハ左ノ場合ニ於テハ賣買ノ違約人トシテ會所限處分ス
ルヲ得(十五年第廿六號 布告ヲ以テ追加)

第一 賣買主雙方若クハ一方其會所ニ差入ヘキ證據金ノ差入方ヲ
怠リタルトキ

第二 賣買主雙方若クハ一方其取引約定ノ期日ニ至リ其約定ヲ執
行セザルトキ

第三 會所ニ於テ定メタル現米検査ノ方法及受渡上ノ期約ニ背キ
タルトキ

第六節 會所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ會所ノ取引上
ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トナ其者ノ證據金及身元金ヲ
以テ償ハシメ其者ヲ除名スルニ止ルヘシ而シテ仍ホ其損失ヲ償フ
不能ハサルトキハ會所ニ於テ其責ニ任スヘシ(十五年第廿六號 布告ヲ以テ追加)

第十條 賣買取引ノ手續

第一節 會所ニ於テ爲ス所ノ賣買取引ハ現米直取引ト定期トノ二様
ニ分ナ又其定期ヲ二種ト爲シ其一ヲ約定ノ期限ニ至リ現米金ノ受
渡ヲ爲スモノトシ其二ヲ豫定ノ期限内ニ其取引ヲ完結シ又ハ解約
スルモノトス(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第二節 現米直取引ハ見本米ヲ以テ會所内ニ於テ賣買ヲ爲シ其現石
受渡ノ順序ハ會所ノ規則ニ從フヘシ(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第三節 定期賣買ヲ約定シタルキハ會所ノ役員ニ届出テ賣買主雙方
ヨリ約定ノ證據金ヲ會所ニ差入ルヘシ此證據金ハ少クトモ約定代
金高十分ノ一ヨリ下ルヘカラス又此證據金ノ外ニ時々相場ノ高低
ニ因テハ追證據金或ハ期日前ニ至リ猶ホ其約定ヲ確固ナラシムル
爲メ増證據金ヲ差入シムヘシ(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正 十五
年第六十六號 布告ヲ以テ約定代金十
分ノ二ヲ十分
ノ一ト改ム)

第四節 定期賣買約定ノ期限ハ三ヶ月ヨリ永カルヘカラス而シテ其
期日ニ至レハ會所ノ役員立會ノ上必ズ現米金ノ受渡シヲ爲シ其取

引ヲ完結スヘシ但約定済ノ分ヲ雙方ノ都合ニヨリ其期限内ニ買戻
シ又ハ買受ケタル分ヲ他人へ賣渡スヲ得(十三年第十九號
布告ヲ以テ改正)

第十一條 手数料ノ定規(十八年第三十六號布告
ヲ以テ本條各節共改正)

第一節 會所ニ於テ賣買者雙方ヨリ領收スヘキ手数料ハ會所ニ於テ
相當ノ額ヲ定メ「大藏卿農商務卿」ノ認許ヲ受クヘシ

第二節 手数料ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關係スル他ノ債主ニ
先ツテ收受スルコトヲ得

第十二條 會議ノ規則

第一節 會所ノ會議ヲ分ツテ肝煎會議ト株主總集會トノ二類トス

第二節 肝煎會議ハ毎月何回ト定メ頭取ヲ以テ議長ト爲ス此會議ニ
於テ發言ノ權ハ一人ニ付一説ト定メ衆說ヲ取りテ其議事ノ可否ヲ
決ス若シ可否ノ數相半ハスルキハ議長ノ判決ニ任カス

第三節 右會議ニ當リ出席定員ノ半ハニ充タサルキハ其議事ヲ始ム
ヘカラス但急遽ノ事件ハ格別ナリトス

第四節 株主ノ總集會ハ毎年一度又ハ數度例日ヲ定メテ之ヲ開ク此
集會ハ頭取肝煎ノ撰舉及ヒ會所營業ノ實況計算ノ得失ヲ議スルヲ
主務トス

第五節 株主五分ノ一以上ノ請求又ハ肝煎ノ衆議ニ依リテハ臨時總
集會ヲ開クヲ得

第六節 總集會ニ於テノ發言ノ權利決議ノ方法ハ便宜ニ從テ之ヲ定
ムヘシ

第七節 總集會ニ於テノ議長ハ頭取又ハ株主中ヨリ撰舉スルモ妨ケ
ナシ

第十三條 資本金増減ノ手續

第一節 會所ニ於テ資本金高ヲ増減セントスル時ハ總集會ノ決議案
ヲ具シ頭取肝煎其次第ヲ詳記シ「農商務卿」ノ指揮ヲ受クヘシ

但其資本金賣買取引ノ景況ニ對シ不適當ト認ムルトキハ「農商
務卿」ハ其適當ノ金額ニ増加スヘキ旨ヲ命スルヲアルヘシ(十五年
第十

廿六號布告ヲ以テ但書追加)

第二節 右増減ノ許可ヲ得タル上ハ直テニ世上ニ公告シ其増減セシ名前書ヲ取纏メタル上「農商務卿」ニ届出且地方管廳或ハ銀行ニ預ケタル營業保證ノ金額ヲ増減スヘシ

第十四條 損益金計算ノ定規

第一節 頭取肝煎ハ毎年兩度以上營業ノ總決算ヲ爲シ其内税金并ニ積立金其他一切ノ社費ヲ引去リ残り損益高ヲ以テ株數ニ割り合セ之ヲ株主ニ分賦スヘシ

第二節 右計算表ハ株主ニ分賦ノ日ヨリ十五日内「農商務卿」ニ届出且世上ニ公告スヘシ

第十五條 納税及積金ノ規則(十八年第三十六號) 布告ヲ以テ改正

第一節 會所ハ政府ニ於テ制定施行スル所ノ收税規則ニ遵ヒ税金ヲ納ムヘシ(十八年第卅六號) 布告ヲ以テ改正

第二節 株主等へ配當スヘキ純益金一ケ年ニ割即百分ノ十以上ノ利

息ニ當ルキハ肝煎ノ衆議ヲ以テ割賦高ノ内幾分ヲ引去リ之ヲ積立テ以テ非常準備金ト爲スヘシ

第十六條 報告ノ定規

第一節 會所及仲買人ハ毎日取扱ノ事項并金穀出納等凡テ之ヲ詳明正確ニ記載シ且其簿記ノ方法ニ於テハ「農商務卿」ノ差圖アルトキハ其差圖ニ從フヘ(十五年第廿六號) 布告ヲ以テ改正

第二節 會所及仲買人ニ於テ使用スル所ノ諸帳簿ハ其名目用法ヲ詳記シ之ヲ「農商務卿」ニ届出ヘシ(十五年第廿六號) 布告ヲ以テ追加

第三節 會所ハ實買實際ノ景況及金穀出納其他役員ノ進退并株主ノ異同仲買人ノ退社ヲ「農商務卿」ニ報告スヘシ(十五年第廿六號) 布告ヲ以テ追加

第十七條 官員檢査規則

第一節 地方長官ハ時々官員ヲ派出シ會所及仲買人營業ノ摸樣其他諸帳簿并現米ノ所在其受渡ノ實況及會所ノ現金等ヲ查覈セシムヘシ又時トシテハ農商務省ヨリ官員ヲ派出シ之ヲ檢査セシムルコト

アルヘシ若シ右検査官員ヨリ疑問等アルトキハ會所ノ役員及仲買人等ハ逐一答辯ヲ爲サ、ルヘカラス(十五年第廿六號) 布告ヲ以テ改正

第十八條 諸願屆其他ノ書類上達ノ定規

第一節 會所ヨリ「農商務卿」ニ差出スヘキ文書中諸願ハ一通其他ハ一通宛ニシテ其差出方ハ地方廳ヲ經由スヘシ(十五年第二十六號) 布告ヲ以テ改正

第十九條 罰則

第一節 會所ノ役員及株主仲買人等此條例ヲ犯スカ又ハ役員タル者株主仲買人ノ條例ニ背犯シタルヲ不問ニ措キ又ハ背犯セシメタル實證アルキハ役員并ニ本人共其輕重ニヨリ三十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス(十三年第十九號) 布告ヲ以テ改正

第二節 (十三年第十九號) 布告ヲ以テ追加
(十六年第三十號) 布告ヲ以テ削除

第二節 官員検査ノ節簿冊書類ヲ差出スヲ拒ミ又ハ疑問ニ答辯ヲ爲サ、ル者アルキハ頭取又ハ其主任者へ五十圓以下ノ罰金ヲ科ス(十三年第十九號) 布告ヲ以テ元二節ヲ三節ニ元三節ヲ四節ト爲ス

十四年第七十二號布告罰則
例處斷方參看第十二類ニ載ス

第四節 會所ノ規約ニ背犯シタル役員株主仲買人ヲ會所限リ處分スルハ之ヲ除名スルカ或ハ過怠料ヲ取立ルニ止ルモノトス但其過怠料ハ株金身元金ノ高二超ルヲ得ス(十五年第二十六號) 布告ヲ以テ改正
第二十條 (十五年第二十六號) 布告ヲ以テ追加
(同年第四十六號) 布告ヲ以テ削除
右ノ通制定候事

○米商會所及株式取引所ノ賣買上ニ付處分明治十五年八月 第四十六號) 布告
米商會所及ヒ株式取引所ノ賣買ニ不正惡弊アルカ又ハ賣買取引上ノ景況穩當ナラサル爲メ公共ニ妨害ヲ及ホスト認ムルトキハ「農商務卿」ハ其會所及ヒ取引所又ハ仲買人ノ營業ノ一部又ハ全部ヲ停止若クハ禁止シ又ハ役員ヲ退罷セシムルコトアルヘシ
但本年第二十六號布告米商會所條例追加第二十條ハ削除ス
○米穀金銀等竊ニ賣買取引ヲ爲ス者處分明治十三年四月 第二十一號) 布告
法律定規ニ遵ヒ官許ヲ得タル米商會所株式及ヒ橫濱取引所外若

クハ内タリニ竊ニ米穀并金銀貨幣及株式ノ限月若クハ現場定期起リタル現 賣買其他之ニ類似シタル取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ無効ト爲スヘシ

但本條ヲ犯シタル者ヲ告發シタル者ニハ其告發ニ因テ科シタル罰金ノ全部ヲ給ス其自ラ犯シタル者事未タ發覺セサル前ニ於テ自首シタルキハ其罪ヲ問ハス

右布告候事

○米商會所株式取引所ノ方法ニ倣ヒ物品ノ取引ヲ爲ス者處分明治十六年一月第四號布告

米商會所株式取引所ノ限月若クハ現場賣買ノ方法ニ倣ヒ又ハ之ニ類似ノ方法ヲ用ヒ諸物品ノ賣買取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル

者ハ總テ明治十二年四月第貳拾壹號布告ニ據リ處分スヘシ

○米商會所及株式取引所ノ仲買人竊ニ米穀等ノ賣買ヲ爲ス者處分明治十六年八月第二十九號布告

米商會所及株式取引所ノ仲買人ニシテ竊ニ米穀並金銀貨幣公債證書株式ノ限月若クハ現場定期ヨリ起リタル現場定期ヲ云フ 賣買又ハ其類似ノ取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ五拾圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ米商會所條例及株式取引所條例ノ手續ヲ爲サシム

○米穀限月并現場取引ハ米商會所内ニ限ル大正三年三月三十二號布告

米穀限月賣買ノ儀ハ明治九年第百五號公布ノ趣有之該條例ニ遵ヒ會所ヲ設ケ營業候儀ハ其處ニ依リ許可相成候處右限月并ニ現場定期ヨリ起リ賣買取引ハ米商會所内ニ限リ差許サレ候儀ニテ會所ノ支社出張所ヲ取設ケ又ハ仲買人ノ分店代理人取次人等

第三條 「農商務卿」ハ此創立願書ヲ受領シテ其許可スヘキヤ否ヲ考案シ或ハ之ヲ許可シ或ハ之ヲ許可セサルコトアルヘシ

第四條 發起人右創立許可ヲ受クルニ於テハ諸般ノ規定ヲ議定シテ創立證書及定款申合規則各二通ヲ製シ株主一同記名調印ノ上地方長官ノ奥書證印ヲ受ケ之ヲ農商務省ヘ差出スヘシ

但創立證書及定款等ハ創立許可ヲ得タル日ヨリ遅クトモ三ヶ月間ニ差出スヘシ若シ右期限内ニ差出サルルキハ其許可ハ無効ニ屬スヘシ

第五條 右創立證書及定款申合規則ハ左ノ主旨ニ從ヒ各取引所ノ便宜ニ依テ之ヲ制定スヘシ然レモ必ス此條例ノ旨趣ニ牴觸スルヲ得サルヘシ

創立證書ハ取引所ヲ創立スルニ付株主一同決定シタル綱領ノ條件及ヒ其責任ノ有限或ハ無限有限責任トハ負債償却ノ義務ニ於テ該取引所ノ株券限リ或ハ其株券ノ二倍等其限アルヲ云ヒ無限責任トハ株主一同相連帯シテ各自ノ資力ヲ竭スニ至ルヲ云フヲ明記シ必ス之ヲ遵

守踐行スヘキ旨ヲ政府ニ對シ保證スルモノナリ

定款ハ取引所ヲ創立スルニ付株主一同其取引所ノ便宜ヲ商量決定シテ互相確守スヘキ約束條款ヲ記載スルモノナリ
申合規則ハ買賣取引ニ付買賣主雙方ノ間ニ於テ取引所ニ對シ確守スヘキ規程ヲ記載スルモノナリ

第六條 「農商務卿」ハ右創立證書及定款申合規則ヲ檢按シテ不都合ナシト思考スルニ於テハ之ニ奥書證印ヲ加ヘ免狀ト共ニ之ヲ其取引所ニ下付シテ開業ヲ許スヘシ

但爾後取引所ノ都合ニヨリ其創立證書及定款申合規則ヲ改正加除セントスルキハ其時々「農商務卿」ノ認許ヲ受クヘシ

第七條 取引所ハ開業前ニ於テ其營業保證ノ爲メ資本金高ノ三分二以上ニ當ル現金又ハ公債證書農商務省ヨリ指定スル價格ヲ以テヲ農商務省ニ差出シ預置クヘシ

但シ開業免狀ヲ得タル後滿五ヶ月ニ至リ猶ホ本文ノ手續ヲ爲サ

ス又ハ開業セサルコトアルトキハ其免狀ハ取消タルヘシ

第八條 取引所ハ開業ノ日ヨリ滿五ケ年ノ間其營業ヲ保續スルヲ得

ヘシ右滿期ニ至リ尙ホ營業セント欲スルキハ更ニ允許ヲ受クヘシ

第九條 取引所ニ於テ開業免狀ヲ受ケタル上ハ其免狀并ニ創立證書

ノ寫ヲ添ヘ何月何日ヨリ其商業ヲ創ムヘキ旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ

方法ヲ以テ世上ニ公告スヘシ

第二章 株主并ニ株手形ノ事

第十條 各株主ヨリ入金シタル金額ハ分テ百圓以上一定ノ株式トナ

シ株手形ヲ製シ其株主タルモノヘ之ヲ交付スヘシ

第十一條 株主ハ其取引所ノ營業時間ハ何時ニテモ其金員及ヒ諸帳

簿ヲ檢閲スルコトヲ得ヘシ

第十二條 株主ハ何等ノ事故アルトモ其取引所解散ノ期ニ至ラサル

間ハ其株金ヲ取戻スコトヲ得ス

第十三條 株主ハ其取引所ノ承認ヲ得タル上其所持ノ株式ヲ賣渡シ

又ハ讓渡シコトヲ得ヘシ

第十四條 株主タルモノハ其取引所ノ役員タラサル時間ハ何時ニテ

モ仲買人タルヲ得ヘシト雖モ仲買人トナリタルキハ仲買人ノ規則

ヲ遵守スヘシ而シテ賣買上ニ於テハ之ヲ仲買人ト稱スヘシ

第三章 仲買人ノ事

第十五條 丁年ニシテ仲買人トナラント欲スル者ハ次條ニ定ムル身

元金ヲ差入レ取引所ノ承認ヲ得タル上仲買人トナラントスル願書

ヲ「農商務卿」ニ捧ケ其認許ヲ受クヘシ(十三年第二十號 布告ヲ以テ改正)

仲買人ハ他人ノ委托ヲ受ケテ賣買取引ヲ爲スト自己ノタメニ爲ス

トヲ問ハス取引所ニ對シテハ其賣買取引上一切ノ責任ヲ負フヘシ

(十三年第二十號 布告ヲ以テ追加)

第十六條 株式仲買人ノ身元金ハ貳百圓以上金銀仲買人ノ身元金ハ

千圓以上タルヘシ(十三年第二十號 布告ヲ以テ改正)

第十七條 仲買人ハ丁年者ニ限ルヘシ且ツ一度身代限ノ處分ヲ受ケ

十六年第二十號布告仲買人認許料及金銀貨幣等賣買取引ヲ爲ス者處分方容看本類ニ載ス

十六年第十八號布告仲買人認許料容看本類ニ載ス

十六年農商務省第七號告示仲買人ノ定ム容看本類ニ載ス

タル者ハ其負債ノ義務ヲ免レタル實證アルニ非サレハ入社ヲ許サ
ルヘシ

第四章 役員ノ事

第十八條 取引所ノ役員ト稱スルモノハ左ノ如シ

頭取

肝煎

其他支配人書記方計算方等ノ名義ヲ以テ役員ヲ定ムルハ取引所
ノ便宜ニ任ス

第十九條 取引所ノ肝煎ハ五名以上トシ株主ノ總會ニ於テ取引所ノ
定規ニ從ヒ現ニ三十株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ撰舉シ肝煎
ハ其同僚中ヨリ頭取壹人ヲ推舉シ其住所姓名年齢等ヲ「農商務卿」
ニ具申シテ其認許ヲ受クヘシ「農商務卿」ハ時トシテハ其改撰ヲ命
スルコアルヘシ(十三年第二十號 布告ヲ以テ改正)
支配人以下ノ役員ハ頭取肝煎ノ衆議ニ依リ株主又ハ株主ニアラサ

ル者ヲ撰任スルコヲ得(十三年第二十號 布告ヲ以テ追加)

第二十條 取引所役員ノ在職年限ハ一ケ年タルヘシ

第二十一條 頭取ハ取引所ノ事務ヲ總轄シ取引所一切ノ責ニ任スハ
シ

第二十二條 頭取肝煎ハ其仲買人賣買上ノ差違レテ解キ違約者ヲ處
分スルノ責任アリトス

第二十三條 取引所諸役員職務上ノ責任權限等ハ其取引所ニ於テ適
當ノ規程ヲ設ケ之ヲ定款中ニ記載スヘシ

第五章 一般ノ規程

第二十四條 外國人ヲ取引所ノ株主并仲買人ト爲スコヲ得ス

第二十五條 取引所ニ於テ株式賣買取引ヲナス者ハ其取引所ノ承認
ヲ經タル仲買人ニ限ルヘシ

第二十六條 (本條ハ十四年第二廿八號 布告ヲ以テ刪除)

第二十七條 取引所ノ役員タルモノハ其取引所ニ於テ賣買本人又ハ

仲買人トナルヘカラス

第二十八條 取引所ノ役員及ヒ仲買人ハ他ノ株式取引ヲ爲ス會社ノ役員又ハ仲買人或ハ他ノ銀行并ニ諸會社(官許ヲ經タル合本會社)ノ役員タルヲ得ス

第二十九條 取引所ハ其營業ノ爲メ緊要ナル地所家屋ヲ除クノ外地所家屋ヲ所持スルヲ許サス又之ヲ賣買スヘカラス

第三十條 政府ニ於テ賣買ヲ許シタル諸公債證書及ヒ政府ノ條例ヲ遵奉シテ發行シタル銀行并諸會社ノ株券等ノ賣買ヲ除クノ外此取引所ニ於テ一切他ノ物件ヲ賣買シ他ノ事業ヲ營ムヘカラス

但本條ニ掲載セサル諸會社ノ株券ト雖モ其營業確實ナリト認ムルモノハ「農商務卿」ニ於テ其實買ヲ許可スルヲ得(十三年第五十七號布告ヲ以テ但書追加)

第三十一條 取引所ハ第一章第七條ニ掲ケタル營業保證ノ爲メ農商務省ヘ預クヘキ公債證書ヲ除クノ外自ラ諸公債證書諸株券等ヲ賣

買シ又ハ之ヲ所持スヘカラス

第三十二條 取引所ハ諸證據金ヲ使用スヘカラス又貸附金ヲナスヘカラス

第三十三條 取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ取引所ノ取引上ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トナ其者ノ證據金及ヒ身元金ヲ以テ償ハシメ其者ヲ除名スルニ止ルヘシ而シテ尙ホ其損失ヲ償フコト能ハサルトキハ取引所ニ於テ其責ニ任スヘシ(十五年第六十四號布告ヲ以テ改正)

第三十四條 取引所ハ其取引所ニ於テ株式等ノ賣買ヲ認許シタル銀行并諸會社及ヒ新立會社ノ株式ヲ賣買スルノ依頼ヲ受ルト雖モ其事情ニヨリ之ヲ停止シ又ハ之ヲ許否スルノ權ヲ有ス

第三十五條 取引所ノ諸願伺届又ハ諸證書約定書及往復ノ文書等取引所一般ニ關スル事件ハ頭取肝煎等コレニ記名調印スヘキハ勿論ナレモ必ス其取引所ノ名ヲ署シ取引所ノ印ヲ捺スヘシ

第六章 賣買取引ノ事

第三十六條 取引所ニ於テ爲ス所ノ賣買取引ハ現場ト定規ノ二様ニ分テ必ス現物ノ受渡ヲ爲スヘシ

但三ヶ月ヨリ永キ定期ノ約定ヲナスヘカラス

第三十七條 凡取引所ニ於テ賣買ノ約定ヲナシ其定期ニ係ルモノハ約定金高百分ノ五宛ニ下ラサル證據金ヲ賣買雙方ヨリ差入ル可シ而シテ其期限中相庭ノ高低等ニヨリテハ追證據金増證據金等ヲ差入シムルヲ得ヘシ

第三十八條 約定取引ノ期限ニ至ツテハ其品種ニ依リ記名書替等其他受渡シノ手續ハ政府又ハ諸會社ノ成規ニ照シ之ヲ履行スヘシ

第三十九條 約定期限内ニ於テ之ヲ轉賣スルヲ得ヘシト雖モ其期日ニ至レハ必ス現物ノ受渡ヲ爲スヘシ

第四十條 賣買主ニ於テ諸證據金ノ差入レヲ怠リ又ハ期限ニ至リテ其約定履行セサル者ハ都テ之ヲ違約人ト爲スヘシ(十五年第六十號布告ヲ以テ)

正(改)

第七章 手数料ノ事

第四十一條 取引所ニ於テ賣買者雙方ヨリ領收スヘキ手数料ハ取引所ニ於テ相當ノ額ヲ定メ「大藏卿農商務卿」ノ認許ヲ受クヘシ(十八年第三十七號布告ヲ以テ改正)

第四十二條 手数料ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關係スル他ノ債主ニ先ツテ之ヲ收受スルヲ得ヘシ

第八章 検査ノ事

第四十三條 「農商務卿」ニ於テ要用ト思考スルキハ何時ニテモ官員ヲ派遣シ或ハ其地方長官ヘ達シテ其取引所ノ業体及ヒ金銀其他諸帳簿等ヲ検査セシムルヲアルヘシ

第九章 帳簿ノ事

第四十四條 取引所ハ毎日取扱ノ事項ハ勿論金銀ノ出納等凡テ之ヲ詳明正確ニ記載シ且ツ其簿記ノ方法ニ於テ「農商務卿」ノ差圖アル

トキハ其差圖ニ從フヘシ

第四十五條 取引所ニ於テ製定使用スル處ノ諸帳簿ハ其名目用法ヲ詳記シ之ヲ農商務省ヘ届出ヘシ

第十章 諸報告ノ事

第四十六條 取引所ハ賣買實際ノ報告及金銀出納表其他役員ノ進退并株主仲買人ノ姓名等「農商務卿」ノ指命スル所ニ從ヒ時々報告ヲナスヘシ

第十一章 納税ノ事

第四十七條 此取引所ハ道テ政府ニ於テ制定施行スル所ノ收税規則ニ遵ヒ相當ノ税金ヲ納ムヘシ

第十二章 罰則

第四十八條 取引所ノ役員及株主并仲買人等此條例ヲ犯スカ又ハ役員タルモノ株主并仲買人ノ此條例ニ背戾シタルヲ不問ニ措キ又ハ背戾セシメタル實證アルキハ役員并ニ本人トモ其事ノ輕重ニ依リ

三拾圓ヨリ少カラス千圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

第四十九條 官員檢査ノ節取引所役員及ヒ仲買人等簿冊書類ヲ差出スコトヲ拒ミ又ハ疑問ニ答辯ヲ爲サル者アルトキハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ(十五年第六十四號) 布告ヲ以テ改正

第五十條 取引所ノ規約ニ背犯シタル役員及ヒ株主仲買人ヲ取引所限リ處分スルハ之ヲ除名スルカ或ハ過怠料ヲ取立ツルニ止ルモノトス(十五年第六十四號) 布告ヲ以テ但書共追加

但其過怠料ハ株金身元金ノ高二超ユルヲ得ス

○

○爲替手形約束手形條例明治十五年十二月
第五十七號布告
爲替手形約束手形條例別冊ノ通制定ス

(別冊)

爲替手形約束手形條例

第一章 爲替手形

第一節 爲替手形ノ性質及ヒ法式

第一條 爲替手形ハ振出人ヨリ支配人ニ當テ記載ノ金額ヲ受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ拂渡サシムル證券ヲ謂フ

第二條 爲替手形ニハ左ノ件々ヲ記載シ振出人記名調印ス可シ

一 金額

二 振出ノ年月日及ヒ場所

三 支拂ノ期限及ヒ場所

四 支拂人ノ氏名

五 受取人ノ氏名

六 受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ支拂フ可キ旨

第三條 爲替手形ハ一ノ爲替ニ付キ同文ノ手形ニ通又ハ三通ヲ振出スヲ得此場合ニ於テハ各通ニ番號ヲ附シ内一通ニ對シ支拂ヲ爲

シタル時ハ他ノ各通ハ無効タル可キヲ記載ス可シ

第四條 爲替手形ノ金額ハ五圓以上ニ限ル者トス

第二節 支拂期限

第五條 爲替手形ノ支拂期限ハ左ノ如ク區別ス

一 一覽拂

二 定期拂

三 一覽後定期拂

第六條 一覽拂ノ手形ハ其呈示ヲ受ケタル時直ニ支拂フ可キ者トス

第七條 定期拂ノ手形ハ手形ニ定メタル期日ニ支拂フ可キ者トス

第八條 一覽後定期拂ノ手形ハ一覽濟ノ日ヨリ其日數ヲ起算シ手形

ニ定メタル期日ニ支拂フ可キ者トス

第九條 一覽拂ノ手形及ヒ一覽後定期拂ノ手形ハ振出ノ日附ヨリ三

ケ月以内ニ之ヲ呈示ス可シ

第十條 定期拂ノ期限ハ振出ノ日附ヨリ一覽後定期拂ノ期限ハ一覽

濟ノ日ヨリ六ヶ月以内ト爲ス

第三節 爲替資金

第十一條 振出人ハ支拂人ニ對シ爲替資金ヲ交付スルノ義務アル者トス

第十二條 振出人ヨリ支拂人ニ對シ貸方計算アル時ハ之ヲ以テ爲替資金ニ供用スルヲ得

第四節 裏書

第十三條 爲替手形ハ裏書ヲ以テ其所有權ヲ移轉スルヲ得

第十四條 裏書ニハ買受人又ハ讓受人ノ氏名及ヒ年月日ヲ記載シ賣渡人又ハ讓渡人氏名住所ヲ記シ調印ス可シ

第十五條 裏書人ハ振出人及ヒ自己以前ノ裏書人ト共ニ自己以後ノ裏書人及ヒ手形所持人ニ對シ相連帶シテ償還ノ責任ヲ負フ者トス
第十六條 手形ノ裏面ニ餘白ナキ時ハ補箋ヲ爲シ裏書ヲ爲スヲ得

第五節 保證

第十七條 振出人裏書人及ヒ支拂人ハ他人ヲシテ手形ノ支拂ヲ保證セシムルヲ得

保證人ハ其保證ノ旨ヲ手形又ハ別紙ニ記載ス可シ

第十八條 振出人裏書人ノ保證人ハ本人義務ヲ缺タル場合ニ於テ本人ニ代リ他ノ義務者ト相連帶シテ償還ノ責任ヲ負フ者トス

第十九條 保證人支拂ヲ爲シタル時ハ本人ニ代リ其權利ヲ有スル者トス

第六節 引受

第二十條 定期拂手形及ヒ一覽後定期拂手形ノ所持人ハ支拂人ニ其引受ヲ求ムルヲ得

第二十一條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケタル時ハ其旨及ヒ年月日ヲ手形ニ記載シ記名調印ス可シ

第二十二條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケタル時ハ振出人身代限ノ處分ヲ受ケタル場合ト雖モ其取消ヲ爲スヲ得ス

第二十二條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケサル時ハ所持人ハ引受ノ拒ミ證書ヲ受ク可シ

第二十四條 所持人拒ミ證書ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ電信書留郵便其他證據トナル可キ手續ヲ以テ振出人又ハ裏書人ニ通知シテ爲替金額及ヒ諸費用ニ相當スル抵當又ハ保證人ヲ以テ保證ヲ立テシムルヲ得

通知ヲ受ケタル裏書人ハ振出人又ハ自己以前ノ裏書人ニ對シ所持人同一ノ處置ヲ爲スヲ得

第二十五條 振出人又ハ裏書人ノ内既ニ相當ノ保證ヲ立タル者アル時ハ其以後ノ裏書人ハ保證ヲ立ルノ義務ヲ免ル、者トス

第七節 支拂

第二十六條 手形ニ貨幣ノ種類ヲ記シタル時ハ其貨幣ヲ以テ支拂フ可シ

第二十七條 手形所持人ハ支拂期限ニ於テ其支拂ヲ請求ス可シ若シ

定式ノ祝日祭日或ハ慣習ノ休業日ニ當ル時ハ其翌日之ヲ請求ス可シ

第二十八條 手形所持人支拂金ヲ請取ル時ハ手形ニ領收ノ旨ヲ記載シ記名調印シテ金額ト引換ヘ支拂人ニ交付ス可シ

第二十九條 一ノ爲替ニ付キ手形數通アル時ハ支拂人ハ其引受ヲ記載シタル手形ニ對シ支拂ヲ爲ス可シ

第三十條 支拂人期限ニ至リ手形ノ支拂ヲ爲サ、ル時ハ手形所持人ハ支拂ノ拒ミ證書ヲ受ク可シ

第三十一條 支拂ノ拒ミ證書ヲ受ケタル者ハ其旨ヲ電信書留郵便其他證據トナル可キ手續ヲ以テ振出人及ヒ各裏書人ニ通知ス可シ

第八節 拒ミ證書

第三十二條 支拂人手形ノ引受又ハ支拂ヲ拒ム時ハ手形ニ附箋ヲ爲シ其旨及ヒ年月日ヲ記載シ記名調印ス可シ之ヲ拒ミ證書ト爲ス

第三十三條 支拂人拒ミ證書ヲ作ルコト肯セス又ハ其住所分明ナラ

ス又ハ不在ニテ代理人ナキ時ハ所持人自ラ其始末ヲ記シ記名調印シテ郡區役所若クハ戸長役場ノ證印ヲ受ケ拒ミ證書ニ代用ス可シ
第三十四條 支拂人身代限ノ處分ヲ受ケタル場合ニ於テハ支拂期限前ト雖モ手形所持人ハ拒ミ證書ヲ受クルヲ得

第九節 償還ノ要求

第三十五條 手形所持人支拂ノ拒ミ證書ヲ受ケタル時ハ其日附ヨリ十五日以内ニ振出人裏書人ノ中一人若クハ數人ニ對シ爲替手形ノ金額期限後ノ利子及ヒ拒ミ證書并ニ通知ノ費用ノ償還ヲ要求スルヲ得

第三十六條 第三十五條ノ要求ニ對シ償還ヲ爲シタル裏書人ハ其日ヨリ十五日以内ニ自己以前ノ裏書人又ハ振出人ノ中一人若クハ數人ニ對シ自己ノ償還シタル金額及ヒ其利子ヲ要求スルヲ得

第三十七條 振出人ハ爲替資金ヲ支拂人ニ交付シタルノ故ヲ以テ償還ノ要求ヲ拒ムヲ得ス

第三十八條 要求ヲ受ケタル者ハ拒ミ證書ヲ附シタル爲替手形及ヒ證據ヲ添ヘタル計算書ト引換ヘニ非レハ償還ヲ爲スニ及ハス

第三十九條 第九條ノ呈示期限第二十七條ノ支拂請求期限及ヒ第三十五條第三十六條ノ要求期限ヲ怠リタル者ハ裏書人及ヒ爲替資金ヲ交付シタル振出人ニ對シ要求ノ權利ヲ失フ者トス但引受ヲ爲シ若クハ爲替資金ヲ受ケタル支拂人又ハ資金ヲ交付セサル振出人ニ對シ第九條第二十七條ノ期限ニ係ル者ハ振出ノ日附ヨリ起算シ第三十五條第三十六條ノ期限ニ係ル者ハ拒ミ證書ノ日附ヨリ起算シテ三ヶ年間償還ヲ要求スルヲ得

第十節 紛失

第四十條 手形所持人手形ヲ紛失シタル時ハ直ニ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ其手形ノ流通ヲ止ムル旨ヲ廣告シ又電信書留郵便其他證據トナル可キ手續ヲ以テ支拂人ニ通知シ其支拂ヲ止メシム可シ
第四十一條 手形紛失人ハ振出人ニ紛失ノ旨ヲ證シ代手形ヲ請受ケ

各裏書人ナシテ再ヒ之ヲ裏書セシメ更ニ其手形ヲ流通スルヲ得
但振出人ハ手形紛失人ナシテ保證ヲ立テシムルヲ得

第四十二條 手形紛失人代手形ヲ受ケ得サル時ハ支拂期限ニ至リ支
拂人ニ對シ真正ノ所持人タル旨ヲ證明シ支拂ヲ請求スルヲ得但
支拂人ハ手形紛失人ナシテ保證ヲ立テシムルヲ得

第二章 約束手形

第四十三條 約束手形ハ振出人記載ノ金額ヲ受取人又ハ其所有權ヲ
受ケタル人ニ自ラ支拂フ可キ旨ヲ約束シタル證券ヲ謂フ

第四十四條 約束手形ハ定期拂ニシテ金額ハ貳拾五圓以上ニ限ル者
トス

第四十五條 爲替手形ニ付キ定メタル規則ハ第三節第六節其他約束
手形ノ性質ニ反スル條目ヲ除クノ外之ヲ約束手形ニ適用ス可シ

第三章 通則

第四十六條 第三十五條第三十六條ノ要求期限ハ路程ニ要スル日數

八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フルモノトス

第三十五條第三十六條ノ要求期限及ヒ第九條呈示ノ期限外國ト關
係スルモノハ其路程ニ要スル相當日數ノ猶豫ヲ與フルモノトス

第四十七條 第一節第四節及ヒ第四十三條第四十四條ノ規程ニ合セ
サル手形ハ裏書ヲ以テ所有權ヲ移轉スルヲ得ス

○專賣特許條例 明治十八年四月
第七號布告

沿革略記

明治四年四月新發明品專賣略規則ヲ定ム○五年三月
第百五號布告ヲ以テ專賣略規則ヲ當分廢止シ向後諸
物品新發明スル者アルニ於テハ地方官ニテ發明品及其工夫
ノ手續等取調工部省ニ届出サシム○十八年四月第七號布告
ヲ以テ前令ヲ廢シ更ニ專賣特許條例ヲ定ム是レ現行法ナリ

專賣特許條例別冊ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但明治四年四月七日布告專賣略規則及明治五年三月第一百五號布告ハ
廢止ス

(別冊)

專賣特許條例

第一條 有益ノ事物ヲ發明シテ之ヲ專賣セント欲スル者ハ「農商務卿」ニ願出其特許ヲ受クヘシ

「農商務卿」ハ其專賣ヲ特許スヘキモノト認ムルトキハ專賣特許證ヲ下付スヘシ

第二條 專賣特許ヲ願出ルニハ其願書ニ發明ノ明細書并必要ノ圖面ヲ添フヘシ但時宜ニ依リ其現品又ハ雛形ヲ差出サシムルコトアルヘシ

第三條 專賣特許ノ年限ハ專賣特許證ノ日附ヨリ起算シ十五年ヲ超ユルコトヲ得ス

第四條 左ノ諸項ニ觸ル、モノハ專賣特許ヲ願出ルコトヲ得ス

一 他人ノ既ニ發明シタルモノ

但他人ヨリ讓受ケタルモノハ此限ニアラス

二 專賣特許願出以前公ニ用ヒラレ又ハ公ニ知ラレタルモノ

三 治安、風俗、健康ヲ害スヘキモノ

四 醫藥

第五條 軍用ニ必要ナリト認メ又ハ廣ク用ヒシムルコトヲ必要ナリト認ムル發明ニハ「農商務卿」ニ於テ專賣特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタルモノト雖モ之ヲ取消スコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テハ「農商務卿」ニ於テ相當ト認ムル報酬金ヲ其發明者ニ下付スヘシ

第六條 專賣特許ヲ願出ルノ權及專賣ノ權ハ相續者ニ傳ハルヘキモノトス

相續者ニ於テ專賣ノ權ヲ相續シタルトキハ三ヶ月以内ニ農商務省ニ届出ヘシ

第七條 專賣ノ權ヲ他人ニ讓與又ハ分與セントスルトキハ「農商務卿」ニ願出ヘシ

第八條 專賣人其發明ヲ改良シタルトキハ追加專賣特許ヲ願出ルコトヲ得但追加特許ハ原專賣特許ノ年限ヲ超ユルコトヲ得ス

第九條 專賣人ノ發明ヲ改良シテ專賣特許ヲ得ント欲スル者ハ專賣人ノ承諾ヲ經ヘシ

專賣人其承諾ヲ拒ミ「農商務卿」ニ於テ改良ニ妨アリト認ムルトキハ其發明ヲ改良ノ部分ト合セテ使用スルノ特許ヲ改良者ニ與フルコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テハ「農商務卿」ニ於テ相當ト認ムル報酬金ヲ改良者ヨリ專賣人ニ與ヘシムヘシ

第十條 專賣人ハ其發明品ニ專賣特許證ノ年月日及年限ヲ標記スヘシ品柄ニ由リ標記スルコトヲ得サルモノハ其上包等ニ標記スヘシ

第十一條 專賣人ノ名簿及發明ノ明細書圖面等ハ農商務省ニ於テ衆

庶ノ觀覽ニ供スヘシ

第十二條 專賣人轉籍轉居又ハ氏名ヲ變換シタルトキハ三ヶ月以内ニ農商務省ニ届出ヘシ

第十三條 專賣特許證ヲ毀損遺失シタルトキハ其再渡ヲ「農商務卿」ニ願出ヘシ

第十四條 左ノ場合ニ於テハ專賣特許無効ニ歸シ其特許證ヲ返納セシムヘシ

一 第四條ノ諸項ニ觸レタルコトヲ發見シタルトキ

二 願書并明細書圖面等ニ相違ノ事實アルコトヲ發見シタルトキ

第十五條 左ノ場合ニ於テハ專賣ノ權ヲ失フ

一 專賣特許證ノ日附ヨリ二年ヲ經テ其發明ヲ實施公行セス又ハ事故ヲ届出スシテ二年間之ヲ中止シタルトキ

二 專賣特許ノ發明品ヲ外國ヨリ輸入シテ之ヲ販賣シタルトキ

第十六條 專賣特許證ヲ下付シタルトキ及專賣特許無効ニ歸シタル

トキ又ハ專賣ノ權ヲ失ヒタル者アルトキハ農商務省ヨリ之ヲ廣告スヘシ

第十七條 專賣特許ヲ願出ル者ハ左ノ免許料ヲ納ムヘシ但願書ヲ却

下スルトキハ之ヲ返付スヘシ

一 五年ノ專賣特許ヲ願出ル者 金拾圓

二 十年ノ專賣特許ヲ願出ル者 金拾五圓

三 十五年ノ專賣特許ヲ願出ル者 金貳拾圓

四 讓與分與ヲ願出ル者 金五圓

五 追加特許ヲ願出ル者 金五圓

六 專賣特許證ノ再渡ヲ願出ル者 金壹圓

第十八條 專賣特許ノ事務ニ關スル官吏ハ專賣特許ヲ願出ルコトヲ得ス

第十九條 專賣人其專賣權ヲ侵サレタルトキハ之ヲ告訴シ并要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得但第十條ノ標記ヲ爲サ、ルトキハ要償ノ訴ヲ爲

スコトヲ得ス

第二十條 專賣特許ノ發明品ヲ偽造シ若クハ外國ヨリ輸入シ又ハ專賣特許ノ方法ヲ竊用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罪金ヲ附加ス

第二十一條 專賣特許ノ機械又ハ方法ヲ以テ製造シタル物品ト同一種類ノ物品ニ專賣人ノ記號ニ紛ラハシキ記號ヲ用ヒタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第二十二條 第二十條第二十一條ノ犯罪ニ係ル物品ヲ情ヲ知テ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 第二十條第二十一條第二十二條ノ場合ニ於テハ其物品及犯罪ノ用ニ供シタル物件ヲ沒收シテ專賣人ニ給付シ其既ニ賣捌キタルモノハ代價ヲ追徴シテ之ヲ給付ス

第二十四條 詐偽ノ所爲ヲ以テ專賣特許ヲ受ケ又ハ專賣特許ヲ偽稱シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下

ノ罰金ヲ附加ス

第二十五條 第六條第二項第十二條ノ届出ヲ其期限内ニ爲サ、ル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 第二十條第二十一條第二十二條ノ犯罪ハ專賣人ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十八條 專賣人告訴ヲ爲シタルトキハ裁判官ニ於テ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ發賣ヲ停止スルコトヲ得

附則

明治四年四月七日專賣略規則布告以後本條例布告以前ニ發明シ明治五年^三第三百五號布告但書ニ依リ届出タル事物ニシテ之ヲ專賣セント欲スル者ハ公ニ用ヒラレ公ニ知ラレタルモノト雖モ本條例施行ノ日ヨリ六ヶ月間ニ其專賣特許ヲ「農商務卿」ニ願出ルコトヲ得
本條例布告以前既ニ前項ノ發明ヲ使用シタル者ハ本條例施行ノ日ヨ

リ一ケ年間ニ其使用特許ヲ「農商務卿」ニ願出ルコトヲ得此場合ニ於テハ本條例第十七條專賣特許ノ免許料ト同一ノ金額ヲ納ムヘシ

○專賣特許手續^{第十八年四月}
今般專賣特許條例制定候ニ付專賣特許手續別紙ノ通相定ム

(別紙)

專賣特許手續

- 第一條 專賣特許ニ關スル願書及届書ハ總テ地方廳ヲ經テ農商務省ニ差出スヘシ
- 第二條 專賣特許ヲ願出ルトキハ壹個ノ發明ニ付願書二通明細書并圖面各三通ニ免許料ヲ添フヘシ
- 二人以上協同シテ一個ノ發明ヲ爲シタルトキハ其願書及明細書等ニ連署スヘシ
- 第三條 明細書及圖面ハ願人ヨリ封緘シテ之ヲ差出シ地方廳ハ封緘ノ儘之ヲ農商務省ニ進達スヘシ
- 第四條 專賣特許願書ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ
 - 一 發明ノ名稱
 - 二 專賣特許ノ年限
 - 三 條例ニ抵觸セサル旨
 - 四 願書明細書等ニ相違ノ事實ナキ旨

第五條 明細書ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ

一 發明ノ目的及性質ノ大體説明

二 圖面ノ解説圖面ヲ添フルトキハ

三 發明ノ製作構造組成及使用ノ方法等ニ關スル詳細ノ説明

四 發明ノ區域

五 發明人ノ族籍住所氏名

第六條 圖面ニハ番號ヲ記シ其各部ニハ片假名又ハ數字ヲ付シ

テ明細書ノ説明ト符合セシムヘシ

第七條 條例第七條ニ依リ專賣權ノ讓與又ハ分與ヲ願出ルトキ

ハ願書ニ通ニ專賣特許證約定書寫及免許料ヲ添フヘシ

第八條 條例第八條ニ依リ追加專賣特許ヲ願出ル者ハ第二條及

第三條ノ手續ニ從フヘシ

第九條 條例第九條第二項ノ特許ヲ受ケント欲スル者ハ其理由

ヲ詳記シタル願書ニ通テ差出スヘシ

第十條 條例第六條第二項及第十二條氏名變換ノ届出ヲ爲スト

キハ農商務省ニ於テ專賣特許證ニ裏書ヲ爲スヘシ

第十一條 條例第十三條ニ依リ專賣特許證ノ再渡ヲ願出ルトキ

ハ其理由ヲ詳記シタル願書ニ免許料ヲ添フヘシ

第十二條 專賣特許ヲ受ケタル者其願書明細書等ニ脱漏又ハ過

誤アルコトヲ發見シテ之ヲ補足又ハ改正セント欲スルトキハ

其理由ヲ詳記シタル願書ニ通テ差出スヘシ

但其補足又ハ改正ノ爲メ發明ノ重要事項ニ變更ヲ生スルモ

ノハ之ヲ願出ルコトヲ得ス

第十三條 專賣特許ヲ受ケタル者約束ヲ以テ他人ニ其發明ヲ使

用セシムルトキハ雙方連署シテ之ヲ届出ヘシ

第十四條 條例第四條第一項ニ觸レ專賣特許無効ニ歸シタル後

先發明者更ニ專賣特許ヲ願出ルトキハ其年限ハ前專賣人ノ特

許年限ヲ超ユヘカラス

第十五條 附則第二項ニ依リ使用特許ヲ受ケント欲スル者ハ其

來歴ヲ詳記シタル願書ニ通テ差出スヘシ

○ 商標條例 明治十七年六月
第十九號布告

商標條例別冊ノ通制定シ明治十七年十月一日ヨリ施行ス

(別冊)

商標條例

第一條 商標ハ農商務省ノ商標簿ニ登錄ヲ經タルトキハ其所有主ニ
於テ登錄ノ日ヨリ十五年間之ヲ專用スルノ權ヲ有ス可シ

第二條 商標ヲ専用セント欲スル者ハ願書ニ見本并明細書ヲ添へ登録ヲ願出ツ可シ其明細書ニハ商標ノ説明、用方并其商品ノ名目種類ヲ詳記ス可シ

其登録ヲ經タル者ハ登録證ヲ下付ス可シ

第三條 商標ノ登録ヲ願出ツル者アルトキハ願書ノ日附ヨリ二ヶ月間之ヲ留置其間ニ之ト抵觸ス可キ願書到達セサレハ之ヲ登録ス可シ

若シ二人以上同一又ハ相紛ラハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ専用センカ爲メ登録ヲ願出ツル者アリ抵觸スルトキハ其願書日附ノ後ナル者ヲ却下ス其日附同シキ者ハ共ニ之ヲ却下ス可シ

第四條 登録商標ハ「農商務卿」ニ於テ衆庶ノ觀覽ニ供スル爲メ便宜ノ方法ヲ定ム可シ

第五條 左ノ商標ハ登録ヲ願出ツルコトヲ得ス

一 已ニ登録セル商標ト同一又ハ相紛ラハシキ商標ニシテ同一種

類ノ商品ニ用フル者

二 地名人名家號會社名ノミヲ以テスル者又ハ商品普通ノ名稱或ハ内外國ノ旗章ノミヲ以テスル者

三 同業者普通ニ用ヒ又ハ商業上慣用セル目印ヲ以テスル者

四 新ニ使用スル商標ニシテ本條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アル商標ト同一又ハ相紛ラハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ用フル者

第六條 登録商標主其専用年限中轉籍轉居又ハ氏名ヲ變換シタルトキ及廢業シ又ハ休業一ケ年ニ及ヒタルトキハ三ヶ月以内ニ之ヲ届出ツ可シ

第七條 登録商標専用年限中其相續者ニ於テ其業ヲ相續シタルトキハ三ヶ月以内ニ之ヲ届出ツ可シ

第八條 登録商標主其商標ノ専用權ヲ他人ニ讓與又ハ分與セントスルトキハ更ニ其登録ヲ願出ツ可シ但専用年限ハ最初登録ノ日ヨリ

通算ス可シ

第九條 登録商標ヲ他ノ種類ノ商品ニ兼用若クハ轉用シ又ハ之ヲ改正セントスルトキハ更ニ其登録ヲ願出ツ可シ
前項ノ場合ニ於テハ第三條ニ依テ處分ス可シ

第十條 登録商標専用満期ノ後之ヲ續用セントスル者ハ満期三ヶ月前ニ更ニ其登録ヲ願出ツ可シ

第十一條 登録證ヲ毀損遺失シタルトキハ其再渡ヲ願出ツ可シ

第十二條 商標ヲ登録セシ後第五條ニ觸レ又ハ登録願書及見本明細書ニ相違ノ事實アルコトヲ發見シタルトキハ其登録無効ニ歸シ登録證ヲ返納セシム可シ

第十三條 登録商標主其業ヲ廢シタルトキハ廢業ノ日ヨリ其専用權ヲ失ス休業三ヶ年ニ及フ者亦同シ

第十四條 商標ノ登録ヲ願出ツル者ハ左ノ手数料ヲ納ム可シ但願書ヲ却下スルトキハ之ヲ返付ス

一 商標一個ニ付金拾圓但一商標ヲ數種ノ商品ニ兼用若クハ轉用スル者ハ其商品一種コトニ金五圓ヲ加フ

二 商標ノ讓與分與又ハ改正ヲ願出ツル者及満期續用ヲ願出ツル者ハ商標一個ニ付金五圓

三 登録證ノ再渡ヲ願出ツル者ハ商標一個ニ付金壹圓

第十五條 登録商標主其専用權ヲ侵サレタルトキハ之ヲ告訴シ並要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第十六條 登録商標ヲ偽造シテ使用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其盗用シタル者ハ一等ヲ減ス

第十七條 登録商標ニ相紛ラハシキ商標ヲ造リテ使用シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十八條 第十六條第十七條ノ違犯ニ係ル商標ヲ附シタル商品ヲ情

ヲ知テ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 第十六條第十七條第十八條ノ場合ニ於テハ仍ホ違犯ノ商標ヲ沒收ス其商品ト分離スヘカラサルモノハ商品ヲ破毀セシム

第二十條 詐偽ノ所爲ヲ以テ商標ノ登録ヲ得及商標ノ登録ヲ詐稱シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二十一條 第六條第七條ノ届出ヲ其期限内ニ爲サ、ル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十三條 第十六條ヨリ第十八條ニ至ルノ罪ハ登録商標主ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十四條 登録商標主告訴ヲ爲シタルトキハ裁判官ニ於テ假ニ其告訴ニ係ル商標ヲ附シタル商品ノ發賣ヲ停止スルヲ得

附則

本條例頒布以前使用スル商標ヲ專用セント欲スル者ハ本條例施行ノ日ヨリ六ヶ月間ニ於テ其登録ヲ願出ツ可シ其願書ハ本條例施行ノ日ヨリ八ヶ月間之ヲ留置其間ニ之ト牴觸ス可キ願書到達セサレハ之ヲ登録ス可シ

若シ二人以上同一又ハ相紛ラハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ專用セシカ爲メ登録ヲ願出ツル者アリ牴觸スルトキハ其願書日附ノ前後ニ拘ハラス「農商務卿」ニ於テ其商標ノ使用最久シキト認定スルモノヲ登録シテ其他ヲ却下ス可シ

本條例第三條ニ依リ處分ス可キ願書ト雖モ本條例施行ノ日ヨリ八ヶ月間之ヲ留置附則第一項ニ依リ願出ツルモノニ牴觸スルトキハ其願書日附ノ前後ニ拘ハラス之ヲ却下ス可シ

前二項ノ場合ニ於テ願書ヲ却下スルトキハ其手数料ヲ返付ス

本條例頒布以前使用スル商標ニシテ現ニ其同業者間ニ專用ノ効アルモノハ商業上慣用セル目印ト雖モ其登録ヲ願出ルコトヲ得

（十八年第四號布告）

商標條例

七百十一

項以ヲ本
追加

○商標登錄願手續第十七年六月
今般商標條例制定候ニ付商標登錄願手續別冊ノ通相定ム

(別冊)

商標登錄願手續

- 第一條 商標ニ關スル願書届書ハ都テ地方廳ヲ經テ農商務省ニ差出ス可シ
- 第二條 商標ノ登錄ヲ願出ツルトキハ商標見本五枚及手数料ヲ添ヘ願書並明細書各二通ヲ差出ス可シ
- 第三條 一箇ノ商標ヲ二種以上ノ商品ニ用ヒンガ爲メ又ハ二箇以上ノ商標ヲ一種ノ商品ニ用ヒンガ爲メ登錄ヲ願出ツルトキハ其商品一種又ハ商標一箇毎ニ各別ノ願書及明細書ヲ差出ス可シ
- 第四條 條例第七條ニ據リ相續ヲ届出ツルトキ其死亡後相續ニ係ル者ハ相續者並身元詳ナル證人二名以上連署シ其生存中ノ相續ニ係ル者ハ登錄商標主相續者連署ス可シ
- 第五條 條例第八條ニ據リ讓與分與ヲ願出ツルトキハ讓主讓受主連署シ讓主ヨリ登錄證並約定書寫及手数料ヲ添ヘ願書二通並明細書分與願ニハ三通ヲ差出ス可シ

商標條例

- 其登錄ヲ經タルトキハ分受人ニハ別ニ分受登錄證及明細書ヲ下附シ分與人又ハ讓受人ニハ前登錄證及明細書ニ裏書捺印シテ之ヲ下附ス可シ
- 第六條 條例第九條ニ據リ登錄商標ノ轉用兼用及改正ヲ願出ツルトキハ第二條ニ準據ス可シ
- 第七條 條例第十條第十一條ニ據リ商標ノ續用及登錄證ノ再渡ヲ願出ツルトキハ手数料ヲ添ヘ願書二通ヲ差出ス可シ
- 第八條 登錄願書ヲ却下スルトキハ其理由ヲ指示ス可シ
- 第九條 登錄商標主ハ其商標ノ彩色ヲ適宜變換スルコトヲ得
- 第十條 登錄商標主ハ農商務省ノ指揮ニ隨ヒ商標又ハ其寫書ヲ登錄證下付ノ日ヨリ三十日以内ニ差出ス可シ
- 第十一條 登錄商標ヲ使用スル商品ノ種類ヲ定ムルコト左ノ如シ但願人ニ於テ其種類ヲ判知シ難キモノハ農商務省ニ於テ之ヲ判定ス可シ

商品ノ種類

- 第一種 化學品及藥劑 酸類 鹽類 「アルカリ」 漂白粉 護謨 樹脂 膠 燐 石鹼 酒精 「グリセリン」 「キナエン」 「モルヒネ」 丁幾劑 舍利別 煎劑 丸藥 膏藥 藥油 麝香 丁子等
- 第二種 染料及顏料 藍玉 藍靛 紫根 紅 朱 丹 綠青 燒青 洋靛 白粉 胡粉 藤黃等
- 第三種 塗料 漆 假漆 「ペンキ」 澁 靴墨等

- 第四種 香料及燻料 香油 髮膏 香袋 香水 炷香 線香 煉香等
- 第五種 金屬及其半加工品 銑鐵 鍛鐵 銅鐵 條鐵 鐵板 銅板 銅板 銅鐵線 鉛 鉛板 亞鉛 亞鉛板 錫 合金等
- 第六種 金屬ノ製品 鑄物 打物 彫鏤品及編物等
- 第七種 利器及尖刃器 鎌 鋸 鑿 錐 鑿 針 釘 剪刀 小刀 剃刀 庖丁 齧嘴等
- 第八種 黃金屬及其製品(アルミニウム金ニツケル銀ノ製品モ此中ニ屬ス) 黃金 銀 四分一 紫銅其他貴金屬ノ合金鏤品及彫鏤品等
- 第九種 珠寶及其彫鏤品 珊瑚珠 眞珠 瑪瑙 水晶 黃玉 碧玉等及其模造品
- 第十種 礦物類(但石炭ハ第五十一種ニ屬ス)
- 第十一種 石材及其製品并彫鏤品 石板石 大理石 砥石 石器等及其模造品
- 第十二種 漆喰類 漆喰「セメント」石膏等
- 第十三種 陶磁器類 諸種ノ陶磁器 土器 坩堝 瓦 煉化石等
- 第十四種 七寶燒
- 第十五種 玻璃及其製品 玻璃壺 玻璃管 彩色玻璃等
- 第十六種 機械類 紡織機 裁縫機 製糖機 印刷機械其他

- 諸製造機械 蒸氣ノ機關及罐等
- 第十七種 農工器具 鋤 鍬 唐箕 熊手 釘拔 鐵鏈 繩 墨等
- 第十八種 學術上ノ器械類 理化學 醫術及測量等ノ器械
- 第十九種 度量權衡
- 第二十種 運送用ノ車類 荷車 馬車 人力車 自轉車等
- 第二十一種 樂器 琴 三味線 胡弓 笛等
- 第二十二種 時計及其付屬品
- 第二十三種 銃砲 彈丸 火藥 烟火類
- 第二十四種 蠶種紙 繭
- 第二十五種 眞綿及木棉綿
- 第二十六種 生絲 絹絲及天蠶絲琴糸 金絲 銀絲等モ此中ニ屬ス)
- 第二十七種 綿絲
- 第二十八種 毛絲
- 第二十九種 麻絲
- 第三十種 絹織物
- 第三十一種 木綿織物
- 第三十二種 毛織物
- 第三十三種 麻織物
- 第三十四種 絹綿麻毛外ノ織物及各種ノ交織物
- 第三十五種 絲類ノ編物及粗物 「レース」打紐 網等

- 第三十六種 被服 諸種ノ衣服 織物製帽子 手套 足袋
- 織物製雨衣 袴 目利安等
- 第三十七種 釀造物及飲料 諸種ノ酒 酢 醬油 蜜柑水 曹達水等
- 第三十八種 砂糖 諸種ノ砂糖 糖蜜 蜂蜜等
- 第三十九種 菓子及麵包類 干菓子 蒸菓子 掛ケ物 西洋菓子 飴 砂糖漬等
- 第四十種 茶及咖啡類
- 第四十一種 煙草類
- 第四十二種 穀菜種子及菓物類 五穀 蔬菜 菓實 種子 根球等
- 第四十三種 挽粉澱粉及其製品 諸種ノ挽粉 澱粉 麵類 湯波 蒟蒻 凍豆腐 凍蒟蒻等
- 第四十四種 味噌 膏物及漬物類
- 第四十五種 肉類海草ノ貯藏食品 鯉節 鰻 乾鮑 海苔 昆布 佃煮 罐詰 雲丹諸種ノ鹹製品等
- 第四十六種 牛乳製品 凝乳 乳油 乳餅 乳粉等
- 第四十七種 煙具及袋物 諸種ノ煙管 煙袋 煙管筒 懷中物等
- 第四十八種 紙及其製品 諸種ノ紙 色紙 短冊 擬革紙 油紙 澱紙 書筒筒 張文匣 一閑張 元結等
- 第四十九種 筆墨類 筆 墨 朱墨 印肉 墨汁 石筆 鉛

- 第五十種 皮革及其製品 馬具 革包 文匣 革帶 靴等
- 第五十一種 燃料 諸種ノ炭 附木 摺附木 燈心等
- 第五十二種 油蠟類 諸種ノ油 蠟 蠟燭 脂肪等
- 第五十三種 肥料 干鰯 鮓粕 油粕 骨粉等
- 第五十四種 木竹材
- 第五十五種 木竹籐製品及其漆塗蒔繪品類 指物 挽物 曲物 桶類 編物 組物等
- 第五十六種 角甲牙類ノ製品
- 第五十七種 藪及草ノ製品 疊表 筵 編笠 繩 麥藁細工等
- 第五十八種 傘杖及履物 諸種ノ傘 杖 下駄 草履 鼻緒等
- 第五十九種 扇子及團扇
- 第六十種 提燈及ランプ類
- 第六十一種 齒磨及洗粉
- 第六十二種 刷子類
- 第六十三種 玩具類 花簪 鞠 碁 將碁 人形 獨樂 楊弓 押繪 造花 骨牌等
- 第六十四種 錦繪及寫真類
- 第六十五種 書籍新聞紙雜誌類

○商標登錄手數料及專賣免許料納期 十九年九月 商務省令 第拾號

七百十八
明治十七年第十三號布達商標登錄願手續第二條第五號第七條ノ
手數料及同十八年第五號布達專賣特許手續第二條第七條第十一
條ノ免許料ハ出願ノ日ヨリ三日以内ニ納ムヘキコトニ改正ス

○第十二類 刑罰、治罪

○刑法明治十三年七月
第三十六號布告

沿革略記 明治元年正月暗殺ヲ行フヲ嚴禁ス○同年同月賄賂ヲ
以テ役人ヘ囑託スルヲ禁シ萬一密ニ餽受スル者ハ雙
方急度處置ニ及フヘキ旨ヲ公布ス○同年三月暗殺ヲ行フ者
ノ取締方ヲ定ム○同年閏四月阿片烟草ノ賣買及ヒ吞用ヲ制
禁ス○同年八月贖金製造者ヲ嚴重取締サシム○同年十月新
律布令迄ハ舊律ヲ用ヒ懲刑禁刑等ノ適用ヲ改ム○同年十一
月新律治定迄四刑各三等ヲ以テ假ニ輕重ヲ配當シ處置セシ
ム○同年十二月產婆ニ墮胎ノ取扱ヲナスヲ嚴禁ス○三年正
月財産沒籍法ヲ廢ス○同年八月販賣鴉片烟律ヲ定ム○同年
十一月北海道流所規程未ク立タサルヲ以テ姑シ流刑ヲ停メ
准流法ヲ定ム○同年十二月新律綱領六卷ヲ頒布ス○六年六
月二百六號ヲ以テ改定律例ヲ公布ス○十三年七月第三十六
號布告ヲ以テ刑法ヲ改定シ尋テ十四年七月第三十六號ヲ以
テ十五年一月一日ヨリ施行ノ旨ヲ布告ス是レ現行法ナリ

刑法別冊ノ通改定候條此旨布告候事

十四年第六十四號布告
以テ密登取締テ地方官
ヘ委任ス十七年第一號布
告ヲ以テ賭博犯ヲ行政警
察ノ處分ニ屬ス共ニ第十
三類ニ載ス參看

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事
(別冊略之)

十五年第四十二號布告ヲ以テ附則第二十二條第四十二條ヲ改正シ第二十四條ヲ削除ス
十六年第三十九號布告ヲ以テ附則第四十九條改正

○刑法附則 明治十四年十二月第六十七號布告

○刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別冊略之)

○新舊法比照例 明治十四年十二月第八十一號布告

刑法第三條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ例ニ從フヘシ

第一條 新舊法比照左ノ如シ

- 一 死刑 新法 舊法 斬絞
- 二 無期徒刑 新法 舊法 懲役終身
- 三 有期徒刑 新法 舊法

四	無期流刑	禁獄終身
五	有期流刑	
六	重懲役	懲役十年
七	輕懲役	懲役七年
八	重禁獄	禁獄十年
九	輕禁獄	禁獄七年
十	重禁錮	懲役十一日以上 五年以下
十一	輕禁錮	禁獄鎖錮十一日 以上五年以下
十二	罰金	贖罪收贖罰金料 二圓以上
十三	拘留	懲役禁獄鎖錮 拘留十日以下
十四	科料	贖罪收贖罰金料 二圓未滿

第二條 舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期內ニ在ル時ハ新法ニ從フ但

舊法ノ刑期ニ過クルヲ得ス 舊法ニ於テ懲役百日ニ該ル者新

禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ二月以上
百日以下ノ重禁錮ニ處スルノ類

若シ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク
新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ舊法ニ於テ禁獄三十日ニ該ル者新法ニ照ラシ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ禁獄三十日ニ處スルノ類

第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ過ルヲ得ス舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處スルノ類

若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ禁獄ニ該ル者新法ニ照ラシ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ二月以上二年以下ノ禁獄ニ處スルノ類

第四條 舊法ノ贖罪收贖若クハ罰金科料ノ金額新法主刑ノ金額内ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ金額ニ過クルヲ得ス

第五條 舊法新法ノ罰金科料共ニ多數算數アル者ハ其算數ノ寡キ者ニ從フ但其多數ノ寡キ者ニ過クルヲ得ス

第六條 舊法ニ於テ單ニ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金ヲ附加ス

可キ時ハ其罰金ヲ附加セス

第七條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金科料ニ該ル時ハ新法ニ從フ

舊法ニ於テ贖罪收贖若クハ罰金科料ニ該ル者新法ニ照シ體刑ニ該ル時ハ舊法ニ從フ

第八條 舊法ニ從ヒ贖罪收贖ニ處シタル者其金額ヲ延期限内ニ納完スル能ハサル時ハ一圓ヲ一日ニ折算シ輕禁錮又ハ拘留ニ換フ但一圓未滿ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第九條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ新法ノ附加刑ヲ適用セス但除族追奪位記沒收ノ類ハ舊法ニ從フ

第十條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ禁錮ノ刑ニ處スル時ハ監視ヲ附加セス

第十一條 華士族ノ犯罪新法ニ於テ輕罪ニ該ル者舊法ニ從ヒ處

斷スル時ハ其族ヲ除セス

第十二條 新法ト舊法トナ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

第十三條 舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ス

○刑法治罪法施行期日 明治十四年七月第三十六號布告

刑法治罪法來明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

○憲兵職務ニ關シ又ハ其職務ニ對スル犯罪處斷方 明治十五年三月第七十三號布告

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

○地方違警罪目發布届出方 第十四年七月十七號

刑法第四百三十條ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルトキハ之ヲ主務ノ省ニ届出ヘシ此旨相違候事

○軍人制服着用夜中無燈火乘馬ノ件 十五年四月第二十二號
刑法第四百貳拾七條第三項夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者ト有之候處軍人制服ヲ着用乘馬シタル者ハ右ノ限ニ無之候條此旨相違候事

○諸罰例處斷方 明治十四年十二月第七十二號布告

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰例ニ係ルモノハ左ノ例ニ照シテ處斷スヘシ

第一條 凡懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第二條 凡禁獄及ヒ禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第三條 凡罰金及ヒ科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未滿ヲ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四條 法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ咎可申付トアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條 法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第六條 法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依テ處斷ス

第七條 前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スル者ト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得

○ 爆發物取締罰則 明治十七年十二月
第三拾貳號布告

爆發物取締罰則別冊ノ通制定ス

(別冊)

爆發物取締罰則

第一條 治安ヲ妨ケ又ハ人ノ身體財産ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用シタル者及ヒ人ヲシテ之ヲ使用セシメタル者ハ死刑ニ處ス

第二條 前條ノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用セントスルノ際發覺シタル者ハ無期徒刑又ハ有期徒刑ニ處ス

第三條 第一條ノ目的ヲ以テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四條 第一條ノ罪ヲ犯サントシテ脅迫教唆煽動ニ止ル者及ヒ共謀ニ止ル者ハ重懲役ニ處ス

第五條 第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入販賣讓與寄藏シ及ヒ其約束ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六條 爆發物ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者第一條ニ記載シタル犯罪ノ目的ニアラサルコトヲ證明スルコト能ハサル時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七條 爆發物ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官吏ニ告知ス可シ違フ者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 本則ニ記載シタル重罪犯アルコトヲ認知シタル時ハ直ニ警察官吏若クハ危害ヲ被ムラントスル人ニ告知ス可シ違フ者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九條 本則ニ記載シタル重罪ノ犯人ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメ又ハ其罪證ヲ湮滅シタル者ハ正犯ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第十條 本則ニ記載シタル重罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第八十條及ヒ第八十一條ノ例ヲ用ヒス但十六歳未満ニシテ是非ノ辨別ナキ者ハ刑法ニ從フ

第十一條 第一條ニ記載シタル犯罪ノ豫備陰謀ヲ爲シタル者ト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シ因テ危害ヲ爲スニ至ラサル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス第五條ニ記載シタル犯罪者モ亦同シ

第十二條 本則ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ仍ホ重キ者ハ重キニ從テ處斷ス

○勳章年金褫奪停止
明治十六年六月
第貳拾貳號布告
勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ勳章及年金ヲ褫奪

ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權及年金ヲ受ルコトヲ得ス

○勳章年金褫奪及停止取扱手續明治十九年七月
明治十六年九月第三十九號達勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ改正スルコト左ノ如シ

勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

第三項 懲戒例及免黜條例ニヨリ免官セラレタル者

第四項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 第一條第一項ニ觸ル、者輕罪ヲ犯シタル者ナルトキハ裁判確定ノ後裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ其重罪

ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第三十二條陸軍刑法第二十八條第二十九條海軍刑法第十七條ニ依リ處分ス

第三條 第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第四條 賞勳局總裁ハ其具申ヲ審査シ重禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ於テ其

褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第五條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム

褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヘ通知スヘシ

第六條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ

第七條 褫奪シタル勳章勳記年金票ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ還納スヘシ但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係ルトキハ其宣告書寫ヲ添フヘシ

第八條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及ヒ事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

但公訴權消滅シタルトキ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦其事狀ヲ詳記シテ之ヲ申告スヘシ

第九條 重罪輕罪ヲ犯シ未ダ其訴ヲ受ケスト雖モ現ニ拘留セラレタルトキハ檢察官ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第十條 外國勳章佩用免許狀ヲ沒收スルトキモ亦總テ此手續ニ準據スヘシ

○治罪法 明治三十三年七月
第三十七號布告

沿革略記

明治二年九月彈正臺彈例ヲ定ム○同年十一月刑部省例ヲ更定ス○同年同月獄廷規則ヲ定ム○三年五月彈正臺彈シテ流以下ノ罪犯ヲ專斷スルヲ許シ死刑ノミ刑部省ニ伺出サシム○四年四月從來刑部省彈正臺ニ於テ取扱掛ノ事務一切司法省ニ引受取計フヘキ旨ヲ達ス○六年二月司法省第二十二號ヲ以テ裁判所斷獄則例ヲ編成シ之ヲ布達ス○六年六月司法省達ヲ以テ假ニ檢事職制ヲ定ム○七年一月第十四號達ヲ以テ檢事職制章程司法警察規則ヲ定ム○同年十月第三百三十二號達ヲ以テ司法警察事務ヲ當分使府縣ニ委任ス○八年五月達ヲ以テ檢事職制章程ヲ更定ス○同年同月第九十一

號布告ヲ以テ大審院諸裁判所職制章程ヲ定ム○同年同月第九十三號布告ヲ以テ刑事上告手續ヲ定ム○同年六月第三百三號布告ヲ以テ裁判事務心得ヲ定ム○九年四月第三十九號達ヲ以テ七年第十四號達司法警察規則ヲ廢ス○同年同月司法省第四十七號達ヲ以テ糾問判事職務假規則ヲ定ム○同年同月司法省第四十八號達ヲ以テ司法警察假規則ヲ設ク○十年二月第十七號布告ヲ以テ保釋條例ヲ定ム○同年同月第十九號布告ヲ大審院諸裁判所職制章程及控訴上告手續ヲ改正ス○十三年七月第三十七號布告ヲ以テ治罪法ヲ創定シ尋テ十四年七月第三十六號布告ヲ以テ十五年一月一日ヲ施行ノ期日トス是レ現行法ナリ

治罪法別冊ノ通創定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事

(別冊略之)

○治罪法中當分ノ便宜法ヲ定ム 明治十四年九月
第四拾六號布告

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ
不及其儀候事

十四年第三十六號布告ヲ
以テ施行期日ヲ定ム本類
ニ載ス參看

○ 治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

○ 治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事

○ 治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ準シ處分スルヲ得

○ 治罪法第二百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索

致シ苦シカラス

○ 治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲナ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヲ得

○ 治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ苦シカラス

右布告候事

○ 刑事裁判所被告人責付手續明治十四年九月第四十七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼

出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

○治安裁判所ニ於テ輕罪裁判ヲ開ク場合明治十四年十月第五拾四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

○陪席判事補充判事指定方明治十四年十月第五拾五號布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

○小笠原島裁判事務處分方明治十四年十月第五拾六號布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所即チ違警審裁判所即チ輕罪ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行

候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○伊豆七島裁判事務處分方明治十四年十月第五拾七號布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○勾引狀ヲ以テ引致セシ者夜間留置方明治十四年十月
第五拾九號布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限り裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告俟事

○商船内犯罪取扱規則明治十四年十二月
第六十五號布告

商船内犯罪取扱規則別冊ノ通制定ス

(別冊)

商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲ス
ヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アル
ヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證

憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルヲ能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

○治安裁判所ニ輕罪裁判ヲ開ク時警部檢事ノ職務代理明治十四
年十二月
第七拾壹號布告

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

○無能力者法律ニ定メタル代人及民事擔當人明治十四年十二月
第七十三號布告
治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱

スル者ハ左ノ通

無能力者

- 一 未丁年者
 - 二 妻タル者
 - 三 白痴瘋癲人
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
- 法律ニ定メタル代人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
 - 二 夫タル者
 - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
- 民事擔當人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者

二 夫タル者

三 白痴瘋癲人ノ保管者

四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

○相川外十三ヶ所治安裁判所ニ輕罪裁判ヲ開ク 明治十四年十二月 第七十七號布告

本年^十第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサルモノニ限リ
治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ヘキ旨布告候處當分ノ
内相川豐岡洲本田邊脇町高山西郷平戸福江嚴原天草大島大曲八
戸ノ各治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判
スルコトヲ得ヘシ

但本文ノ場合ニ於テ訟庭内治罪ノ手續等ハ本年第五十四號布
告但書ノ通タルヘシ

○沖繩縣裁判事務及治罪手續 明治十四年十二月 第七十九號布告

北海道ノ項八十五年第十
四號布告及同年二十八號
布告ヲ以テ消滅
第五十三號布告ハ十六年
第二號布告ヲ以テ改正該
布告ハ本紙ニ載ス參看

各裁判所ノ位置及管轄區畫ノ儀本年十月第五十三號ヲ以テ布告候
處北海道函館始審裁判並ニ沖繩縣ノ儀ハ當分從前ノ通其所轄ノ
官廳ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜ノ取計ヲ爲スヘシ
但控訴ノ儀北海道ハ函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所
ノ管轄ニ屬ス

○辯護人ヲ用ヒサル刑ノ言渡無効有効區別明治十五年一月
第一號布告

治罪法第二百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シ
タル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカルヘシト有之候得共其裁判所々屬ノ
代言人無之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言
渡ハ無効ノ限リニ在ラス

○海上路程ノ猶豫明治十五年二月
第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ
一日ヲ加フルモノト定ム

○樺戸集治監囚人輕罪以下治罪手續明治十五年三月
第拾六號布告

十八年第三十三號布告ヲ
以テ但消滅

樺戸集治監ノ囚人假出獄免
刑ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄
官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判ノ管轄ニ屬ス

○憲兵將校以下司法警察事務執行明治十五年五月
第貳拾三號布告

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒
ハ巡查ト同シク司法警察ノ事ヲ行ハシム

十八年第三十三號布告ヲ
以テ重罪ニ關スル事件消
滅

○札幌根室各始審裁判所治罪手續明治十五年六月
第三十號布告

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取計
且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可
ヲ得テ後宣告スヘシ

○沖繩縣重罪犯裁判手續明治十五年七月
第三拾三號布告

明治十四年十月十二月第七拾八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處
沖繩縣管内重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ内同縣ニ於テ審訊シ證憑擬
律按ヲ具ヘ長崎控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ治罪ノ手

續ハ便宜ノ取計ヲ爲スコトヲ得

○空知集治監囚人輕罪以下治罪手續明治十五年八月
第四拾壹號布告

空知集治監ノ囚人假出獄免幽
閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄

官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

○治罪法第二百六條第二百七條中訊問時限明治十五年十一月
第五拾三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處已ムヲ得サ

ル場合ニ於テハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

○始審裁判所ニ重罪裁判ヲ開ク時該所長ノ件明治十六年一月
第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内始審裁判所長

ヲ以テ其裁判長ト爲スコトヲ得

但沖繩縣「札幌縣根室縣」ノ儀ハ從前ノ通タル可シ

○書記立會ナク豫審ノ訊問明治十六年三月
第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナク

十八年第三十三號布告ヲ
以テ但書消滅

十八年第三十三號布告ヲ
以テ札幌根室ノ項消滅

シテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

○治罪法第八十三條ノ事件ニ付高等法院ヲ開カサルヲ得明治十
六年十

二月
第四十九號布告

治罪法第八十三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ

通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得

○輕罪控訴規則明治十八年一月
第貳號布告

明治十四年十二月第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左

ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ抵觸スル條

件ハ當分ノ内施行セス

第一條 控訴ハ治罪法中本按ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖

モ總テ本按ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ

得ス

第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコ

トヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條 治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

○陸海軍治罪法ト交渉處分法明治十八年五月
第拾貳號布告

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施行セス

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者

ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ

管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノ

ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ

戒嚴令ハ第十六類ニ載ス

大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人闘毆殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

○違警罪即決例 明治十八年九月第三十壹號布告

明治十四年^九月第四拾四號布告及^{十二}同年^{十二}月第八拾號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

(別紙)

違警罪即決例

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内

ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラズ

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ

取調べ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セザル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ

訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時

ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テ

ハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若

シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿

サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期

ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サノル者

ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ

其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チ

ニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没
入シテ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達

アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入

シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

○札幌根室始審裁判所ニ重罪裁判ヲ開ク明治十八年十月
第三十三號布告

自今札幌根室始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク但治罪ノ手續

ハ當分ノ内便宜取計フヘシ

○釧路集治監囚人輕罪以下治罪手續明治十八年十二月
第四十二號布告

釧路集治監ノ囚人假出獄免幽
閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄

官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

○罰金及追徴ニ係ル上告豫納金明治十九年六月
勅令第四十六號

朕罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰
 金及追徴金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告趣意書ニ添へ原裁判所
 書記局ニ預置ク可シ否ラサレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス若シ上告
 不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ没入スルノ言渡
 ナ爲スヘシ

○司法官吏ヨリ巡査及兵員要求手續第十四年九月
司法官吏ヨリ巡査及兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フ
 ～シ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物
 件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯
 營ニ照會シテ巡査又ハ憲兵卒ヲ使用スルヲ得

但事機緊急ナル時ハ直ニ之ヲ使用スルヲ得
 第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺又
 ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヲ得
 ○裁判官渡ノ勝本拔書請求者費用上納十四年十二月
治罪法第三百十五條裁判官渡ノ勝本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其

用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト可心得此旨布達候事

○裁判所位置明治十六年一月
第貳號布告

沿革略記 明治四年十二月布告ヲ以テ司法省内ニ始テ別局ヲ設
ケ當分東京裁判所ト稱ス○五年八月達ヲ以テ神奈川
 外二縣ニ裁判所ヲ置ク○同年九月達ヲ以テ兵庫縣ニ裁判所ヲ置ク○同
 年十月達ヲ以テ京都府ニ裁判所ヲ置ク○同年同月達ヲ以テ靜岡外五縣ニ裁
 判所ヲ置ク○六年六月司法省第九十八號達ヲ以テ宇都宮裁
 判所ヲ栃木裁判所ニ合併シ印旛水更津兩裁判所ヲ合シテ千
 葉縣ニ移シ入間群馬兩裁判所ヲ合シテ熊谷縣ニ移ス○七年
 一月達ヲ以テ開拓使管下渡島國箱館ニ裁判所ヲ置ク○同年
 同月達ヲ以テ長崎縣ニ裁判所ヲ置ク○同年四月達ヲ以テ佐
 賀縣ニ裁判所ヲ置ク○同年十二月達ヲ以テ新潟福島兩縣ニ
 裁判所ヲ置ク○八年五月達ヲ以テ新治裁判所ヲ廢ス○同年
 同月第九十二號布告ヲ以テ上等裁判所ヲ東京大坂福島長崎
 ～置ク○同年八月第百二十七號布告ヲ以テ福島上等裁判所
 ナ宮城ニ移ス○同年十二月第百九十三號布告ヲ以テ鹿兒島

十九年勅令第六十二號ヲ以テ新潟治安裁判所官廳ヲ郡中浦原南浦原ノ内ト改メ

十九年勅令第四十五號ヲ以テ東浦原ヲ新發田治安裁判所ノ管轄トス

十九年勅令第六十二號ヲ以テ南浦原ノ内ヲ長岡治安裁判所ノ管轄トス

裁判所位置

所									
新潟									
相川	高田	長岡	新發田	新發田	新發田	新發田	新發田	新發田	新發田
相川	糸魚川	高田	六日町	柏崎	長岡	村上	新發田	新發田	新潟
新潟縣									
越後									
山城	佐渡	佐渡	佐渡	佐渡	佐渡	佐渡	佐渡	佐渡	佐渡
宇治ノ内	乙訓 紀伊 久世 相樂 綴喜	下京區 愛宕 葛野 宇治ノ内	全國三郡	西頸城	中頸城	南魚沼	刈羽ノ内	古志 北魚沼 三島 刈羽ノ内	南浦原ノ内
								岩船	北浦原 東浦原
									新潟區 西浦原 南浦原ノ内

裁判

長野										甲府	
上田										甲府	
岩村田	上田	福島	大町	上諏訪	飯田	松本	飯山	長野	谷村	甲府	甲府
長野縣										山梨縣	
信濃										甲斐	
北佐久	小縣 埴科ノ内 更級ノ内	西筑摩ノ内	東筑摩ノ内 南安曇ノ内	上伊奈ノ内 諏訪	上伊奈ノ内 下伊奈	西筑摩ノ内 南安曇ノ内 上伊奈ノ内	下高井 上水内ノ内 下水内	埴科ノ内	上水内ノ内 上高井 更級ノ内	南都留	東山梨 西東八代 南巨摩